第15回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 発表

今年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。よろしくお願いします。

第一五回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二一年七月二五日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

今年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特別賞、三田誠広賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人協会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を盛り上げ、育てていっていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切にお願いする次第です。

この授賞式は十月三十日土曜日東京神田「山の上ホテル」での全国同人雑誌協会総会・全国同人雑誌会議にて行われます。協会会員以外の方でも参加できますので、どうぞ御来席ください。

またこの結果及び選評とその動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第15回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「破れ蓮（はちす）」（「じゅん文学」104号）
飯田 労

特別賞

「狐火」（「仙台文学」95・96号）
渡辺光昭

三田誠広賞

「夢の岸」（「中津川文芸」復刊5号）
鴨居 諒

河林満賞

「しずり雪」（「飢餓祭」46号）
小網春美

読者賞

「負け犬」（「ふくやま文学」32号）
瀬崎峰永

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「ぺん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

評価が分かれた

三田誠広

みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学名誉教授

候補作のレベルが高く評価が分かれたため選考は困難を極めた。最終的には順位をつけざるをえなかったが差は僅かだ。票が集まらなかった「負け犬」（瀬崎峰永）は暴行の被害者の少女が自殺に到る話だが、救急センターの報告書から始まって、医師を中心にした三人称の叙述、ソーシャルワーカーのカンファレンスメモと、多彩な文体の断片を重ねて、描かれている事実に客観的な視点をもたせようという試みを評価したい。残念なのは被害者の告白の部分が長すぎて、作品が単調になり、せっかく試みた客観性が崩れてしまったことだ。少女の告白そのものにはそれなりの説得力があるのだが、そこに単純なファーザーコンプレックスという見解を提示する医師を登場させることで、かえって作品を底の浅いものにしている。あるいは思いやりの深いソーシャルワーカーが登場するので、彼女の視点ですべてを描くのも一つの方法だったのではないかと思う。

次の「しずり雪」（小網春美）は商業文芸誌に多い絵空事のような恋愛とは一線を画した、老いた男と中年の女の奇妙で危うい関係を精密に描いた作品で、経営者と従業員という立場の違いや年齢差、さらに死に瀕した病人と介護者という関係を超越した、類例のない確固とした絆が男と女の間に芽生え深まっていくさまが、見事に描かれている。リアリズムに徹した筆致にも好感がもて、重い読後感をもたらす秀作であると思われた。例年のレベルであればこの作品がまほろば賞であってもよかったという気がしたが、昨今の同人誌の充実ぶりを見ると、来年はもっとレベルが上がりそうだという予感がする。

まほろば賞に決まった「破れ蓮」（飯田労）は崩壊しつつある農村を舞台に、嫁姑の問題から老人介護の問題に移行し、さらに認知症の進行から暴力性を帯び、もはや怪物のような存在となった母親の姿が、息詰まるような濃密なリアリズムで描かれる。蓮根を栽培する泥田の中での母殺殺しに到る展開は圧巻で、受賞に相応しい迫力がありテーマの重さがあった。ただこの主人公が蓮根を栽培するほかには労働意欲に乏しく、妻や子に対しても冷淡であることで、読者はシンパシーをもてないのではないかという懸念が残る。とはいえこういう人物はどこにでもいるはずで、作品のリアリティーを削ぐものではなく、受賞に価する作品であることは認めないわけにはいかない。

ここまで述べた三作はリアリズムで描かれているのに対し、「狐火」（渡辺光昭）はリアリズムの領域から一歩踏み出そうという意気込みに充ちた果敢な作品と感じられた。精神に障害を負った伯母のエピソードが中心に置かれている。主人公が生きている日常の世界から見ると、奇行を重ねる伯母の姿は日常性に危機をもたらす異物と感じられる。しかしながら作品の書き手はこの伯母の話を始める前に、主人公の日常である朝のバス停で奇行を重ねる謎の男を描き、主人公が男のあとをつけていく過程を丹念に描く。そのことによって伯母の存在は異物ではなく、むしろ日常性を超えた不思議な領域とつながっていることが示される。さらに作品の最後にもこの謎の男が登場して、主人公と読者をリアリズムを超えた異様な世界にいざなっていく。この作品は「異様を描く」という文学の本来の在り方につながる重要な要素をはらんだ秀作だとぼくは考える。ここには文学の本質に通じる貴重な試みがあり、それが読者を惹きつける独特の魅力になっているのではないだろうか。

こうした素晴らしい作品群の中でも、ぼくがとくに注目したのは「夢の岸」（鴨居諒）という掌編だ。ほかの作品に比べてあまりにも短く印象はうすいのだが、何気ない日常の断片を列ねただけのエッセーのような語り口に、散文詩のように清冽な、一種の名人芸としか言いようのない文体が見てとれる。そこで描かれている日常の断片は、リアルであると同時に不思議な浮遊感を帯びていて、まさにタイトルに示されたような夢幻の世界の入口のような魅力的な気配を漂わせている。

それだけではない。最終的なエンディングの部分に到って文体はさらなる輝きを放ち、そこまでに列ねられた一見バラバラのように見える断片が互いに交錯し、有機的に結びついていく。そのことによってこの作品がただの随想ではなく、作者によって緻密に構築された野心的な文学作品だということが明らかになっていく。しかも作品の冒頭で示された小舟のイメージが最後に再び登場するに及んで、作品は見事な円環を成して終結する。このような秀作がさりげなく置かれている同人誌の世界の奥深さに、改めて感動を覚えずにはいられなかった。

どれも鮮烈な作品

小浜清志

こはま　きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

「負け犬」瀬崎峰永。壮絶な作品である。特に手記の場面は鮮烈である。

白杖の太ったおばあさんに親切心をだして家まで送り届けてから知らない道を歩いた。公園脇にパール色のハイエースが止まっていて運転席から大きくてマッチョな男が降りてきた。スキンヘッドでヤバそうな男だったので私は車とは反対側を歩いた。しかし、男は私に近づいて来るなり、ねえごめんと話しかけてきた。なにがごめんだろうと振り向いた瞬間拳骨で頬を殴られ私は道に倒れる。男はそんな私をハイエースの後部座席まで引きずっていく。私は気が狂ったように大声をあげて助けを求めると、男は私のアゴを拳で殴りごめんと呟く。周りには人がいたはずなのに誰も助けには来なかった。男は車を十分ほど移動させ大音量の音楽をかけたまま後部座席に来るなり平手でなんども顔を殴り制服のスカートをめくってくる。

レイプの描写は幾度も目を背けたくなったが、ただその迫力にねじ伏せられてしまった。迫真の表現は時に戦慄さえ覚え、紡ぎだされる文字に翻弄されつづけた。いたるところにリアリティがありこれは経験者の手記かとさえ思った。人間が泥にまみれ地獄へと落ちていく様をこれほど完璧に描かれると文字は凶器にもなりえるのだと怯えた。最初に読み終えた時、当選作でもいいのではないかと思った。私はこの作品を生涯忘れることはないだろう。

「しずり雪」小網春美。しずり雪という言葉をこの作品で初めて知った。「私」七尾朱里と立花修司の不思議な関係を描いた作品でとても好感を覚えた。

私は立花の経営するラークトラベルでアルバイトとして働き始める。周りは全員大卒であるが私は専門学校卒。しかし、一年のアルバイトから正社員になると私は頭角を現しつねに上位の営業成績を争うようになる。そしてついに社長である立花と対等に渡り合うようになるとプライベートでも付き合いが増えていくが一線を越えることはなかった。それは二十六歳という年の差もあり私の二度の離婚でもあった。二度の離婚をした直後に立花と食事をしたとき、徐々に肥満の度合いを深めていく立花に私が忠告すると、僕が病気になって先がわからないとなったら七尾と結婚すると立花が宣言した。結婚するという言葉があまりにも軽かったが、急に重くなっていく。互いに独身であり年の差があったとしても男と女である。私は逃げ口上として、結婚なんかしなくたって立花さんが病気になったら必ず面倒はみます、立花さんの死に水は私が取ってあげますからと答えてしまった。逃げ口上ではあったが家族のいない立花の面倒は私が見るのだと思った。だから、結婚でなくて、養子だったらなってもいいと伝える。だが、立花は強い口調で養子ではだめなんだと言ったが、口調を和らげるように、七尾に死に水を取ってもらえるとは嬉しいね、そうしたら僕が今住んでいるマンションをあげるよと告げた。そんなやり取りがあってから間もなくして会社の経営が悪化する。二年間低空飛行を続けたのち大手の会社との合併がみのる。社員たちは喜ぶが私は会社を辞める。私は会社を辞めても定期的に立花と連絡をとり合っていたが、ある日マンションに呼び出されて病気のことを知らされ、結婚して金沢で暮らさないかと頼まれる。悩んだあげくに立花の介護をする決心を固めるが、親には言いだしにくい。しかし、金沢行きのいきさつを伝えると、あんなにお世話になった社長の面倒を看る仕事だと割り切ってがんばりなさいと逆に励まされてしまう。死に向かい弱っていく立花との金沢での生活を作者は丁寧に繊細に描いていく。立花の意向を受けて婚姻届けを提出するまでのいきさつも破綻なく表現される。そして、立花の前で私が全裸になった場面は思わず快哉を叫んでいた。男と女の危うい空気をきちんと掬い取り巧みな文字でひろげてくれる作品世界に心が癒された。

「狐火」渡辺光昭。

書き出しから不思議な人物が登場する。決まった曜日と決まった時刻にひとりの男が現れる。通勤者や高校生の列が生まれ始めると、そのタイミングを計ったように毎回思いがけない場所から現れ、列の端から端まで二度行きつ戻りつして、そのなかの一人の傍らにたつ。思いもかけず男に選ばれてしまった当人は、困惑して男を無視するか並ぶ場所を変えたりする。誰に狙いを定めるか、男の根拠は不確かで気紛れにしか見えない。男はその後あらためて最後尾につく。自分の後ろに新たに人が並ぶとさっと身を翻して脇に退き、会釈して場所を譲る。やがてバスがきて行列は次から次へと車内にのみ込まれていくが男は自分の番がやってきても乗ろうとはせず、駆け込みで乗車する人の進路を妨害しないように立ち、慌ただしく乗りこむ一人一人を見送る。その間も、男の口元からは切れ目なくつぶやき

声が漏れ出ている。やがてバスが走り出す後姿を、男は直立不動のまま、敬礼の姿勢を取って見送り続ける。この変わった男とともに本多暁子という伯母の存在がこの作品をより複雑なものにしていく。十五年前の、夏休みに入ってまだ間もない昼下がりに、学生服に身を包み、学生帽を目深にかぶった人が玄関に立っていた。学生帽の庇で顔の半分はかくれていたが白い肌も鮮やかな唇も学生服には違和感があった。「たみおちゃん、ただいま」と主人公直也の父の名を呼んだ。突然背後で悲鳴があがる。母が両手で口を押えたまま棒立ちになっていた。玄関での騒動を聞きつけて妹の梨沙も母の腰にすがり付くようにして訪問者を見ている。狼狽する三人の後ろから祖母が現れ訪問者が暁子伯母だと直也がようやく納得する。暁子は波乱な人生の後精神病での入院生活を余儀なくされ、二か月前に大腸がん末期の診断を受け入院した病院が直也の近くだったため直也が緊急連絡先にされていた。一度会ったきりの暁子伯母が危篤になったとの連絡が入る。時計は午後十時を回っている。最終バスは終わっているし、酒を呑んでいるので車は運転できない。降りしきる雪で交通網は混乱しているであろう。結局二時間かけて辿り着いたが叔母はすでに息をひきとっていた。慌ただしい葬儀を終えて久しぶりに仕事に復帰すると決めると、バス停の男の煩わしさが甦ってくる。しかし、男は現れることはなかった。休みの日にかつて男を尾行したことのある道を辿ってみると男の住んでいた家は火災にあったらしく黒ずんだ柱があるだけだった。そして、夢のなかで男の家に火を点けたのが暁子伯母だと男が告げる。そして「キツネビが遠くに見えていても、そんな時には、キツネは見ている人間の隣にいるんだ。」という謎の言葉を残す。

男も暁子伯母も直也の妄想ともとれる。見方を変えてもそれぞれに見えるのがこの作品の奥の深さであろう。

「夢の岸」鴨居　諒

池の端に小さな船が引き揚げられている。瀬尾が散歩するときには必ず通る場所で、家から歩いて十五分ほどの場所にある。はじめはよくある風景だと思っていたが、よく考えてみたら疑問が次々と湧いてくる。そんなに大きくもない池に船を浮かべても景観がいいとは言えない。ボート乗り場にあるような二人乗りの船で魚釣りをするのも不釣り合いである。少し長めの棹さえあれば池のどこにでも釣り糸は垂らせる。そこで釣りをしている人をみたこともないし、魚がいると聞いたこともない。瀬尾はその夜家族と夕食をともにしながらボートのことを考えていた。あの船は夜みんなが寝静まった頃何処かへ出掛けているに違いない。そして朝になるとまるで何事もなかったように、そしらぬ顔をして全く同じ場所に戻っている。そんな想像をした。という妄想のような話からはじまり、次は娘の人形が消えるというエピソードにつなげられる。文化祭の演劇で人形が小道具として使われることになる。娘が小さい時に買った人形であるがそれは瀬尾にも記憶があった。そして、次の日曜は一家総出で大捜索を行う。家の中のありとあらゆるところ、押し入れの奥、倉庫の中に収めているものを出してまで捜すことになった。しかし、何処にも見あたらない。

「静香があまり放っておくものだからきっとこの家に嫌気がさして出ていってしまったんだよ」

まるで人形に意志があるような最後の言葉が夢の岸と繋がっている。次の竹藪でも同じように夢という曖昧模糊とした概念に向かおうとする。それは家の庭に植えてある花にも現れる。「まるで花達が瀬尾のした何かに腹を立て、しめしあわせて花を咲かせずにしているように思えて仕方がなかった。」

そして、花の咲かない椿の木を切ろうかと庭師と話した翌年にその椿が一遍にたくさんの花を咲かせるようになった。という友人の話に発展していく。まさしく夢の岸辺にたどりつく人間の想像は物にも植物にもあるだろう。

「破れ蓮」飯田　労。

当選作になったこの作品は何といっても緻密さと勢いにあふれている。レンコンを細々と栽培しながらバアバの年金をあてにしながら生きている私は、かつて勤めていた鉄工所にときどき部品を届けにきた工具店の娘と所帯を持った。子も生まれ親と同居するようになってから妻との距離がひろがっていく。バアバと妻のあいだでうろうろするしかなかった。父が死んでからバアバが豹変する。葬儀から戻ってきた夜からバアバは父の座っていた場所を占領し周りには嫁の悪口を吐き散らしていた。妻から別居を切り出されたがそれを実行するには金銭的にも余裕がなかった。ある晩からバアバの奇行が始まる。押し入れにあった古い枕を女の子の死体だと喚いているのである。その後バアバは夜の一時頃になると同じような騒ぎを起こすようになる。妻は寝不足になりパートへの出勤途中で追突事故を起こしてしまう。

それからしばらくして妻は家を出て行く。

痴呆の進んできたバアバの奇行を食い止めるため外側から鍵をかけて出掛けるようにしていたが、ある日玄関の外鍵を忘れて外出してしまった。農協の人と立ち話をしているときバアバの姿を発見する。家では前屈みで歩幅も小さく、時には壁伝いで歩くバアバがまるで鎖を解き放された犬のように、大手を振って歩いている。いかにも楽しさを感じている大きな腕の振り、目標があたかも定まっているかのようなしっかりとした足取り。バアバを追いかけてい

くが私の息はすでにあがっていた。田のひろがる所に立った。バアバは遠い先を相変わらず歩き続けている。家での様子は仮の姿だったのだろうか。私は何度も立ち止まり深く息を吸って走り出した。しかし、バアバはあろうことか植えたばかりの田へ飛び込んだのである。逆にたじろいだのは私の方だった。まだ根もはってない苗は踏まれればすぐに浮いてしまう。急いで田から引き上げなければならない。バアバは容赦なく田を横切る。しかたなく私も田に入りバアバを捕獲する。二人はずぶ濡れ泥まみれになる。バアバを背負い家に戻る。私はやるせなさを抱きながら、バアバが踏みつぶした苗の事を思うと一層足取りが重くなった。

湯船に湯をはりながら、タイルの床に泥が落ちるのも構わずバアバの衣服を手荒くはぎ取っていく。そこから、私がバアバを溺死させるまでの描写が素晴らしい。遊びにも似た湯船でのやりとりが死に繋がっていくのは自然な出来事に見えた。実際に経験をしたことがあるかどうかは別としても作品から伝わってくる迫真性は読み手を惹きつけて放さなかった。一つだけ残念に思ったのは冒頭にバアバの死を持ってきたことである。

迫力ある問題作

五十嵐勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

早稲田大学文学部文芸科卒

79「流謫の島」群像新人長編小説賞

84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長

主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT　プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」

第一五回を迎えたまほろば賞は、候補優秀作が五篇で普段より一つ少なかったが、問題作が集まった。題材が衝撃的で、負の領域に引き込まれる迫力はこれまでで最も大きかった。特に「負け犬」、「狐火」、「破れ蓮」は、それぞれ犯罪の領域にまで深く踏み込むことによって日常を暴いていて、その切開力は鋭く、否応なく内臓を見せつけられる迫真性は、スリリングで、文学の一つの領域をあらためて開示してくれるものだった。ただ、迫力は強いものの、読み終わって読後感がいいかと言うと、何となく後味の悪いものが残る。それがやや作品を親しくさせないもどかしさをも内包していた。またこういう領域の作品は、一般的に

賞を取りにくい。賞を取る場合は、否応なく認めさせるだけの強烈な振り切りを示す場合だろう。負の領域を示しての優れた作品はドストエフスキーの「悪霊」やフォークナーの「サンクチュアリ」などがあり、佐木隆三の「復讐するは我にあり」もそれに近く、その徹底した「悪」の露呈には圧倒され、完璧に打ちのめされるが、そこまではなかなか到達しにくい。中途半端さが若干救いにもなり、それがまた逆に後味の悪さともなって残るのかもしれない。

今回はおそらく評価がバラバラで、どの作品がどんな支持を受けるか、予測がつかなかった。どういう結果になるか、危うい気持ちで選考会に臨んだ。果たして蓋を開けてみると、まったくその通りになった。これほど割れた選考会は初めてだった。しかしこういう選考会があってもいい。二回前の選考会は満場一致で決まった。その逆があってもおかしくない。

瀬崎峰永氏の「負け犬」は、強姦された少女の手記が主旋律になっている。方法は新鮮で、突き放した冷たい叙述がそのリアリティを引き立たせていて、主治医師や看護師の態度が少女の輪郭を際立たせている。医師には医師の世界があり、看護師には看護師の世界があるという割られた存在は、真に交わることなく、事件の結末を招いていく。描写は鋭く、冷たさが光を帯びている。学校に行かなくなり、転落の道を辿って自分の右腕に「負け犬」と刺青するシーンはこの筆者でなければ書けない痛烈なものがある。またそれぞれの部分や領域を丹念に調べてその上で書いている生々しい筆致がある。本来このリアリティだけでも賞に値すると思われるが、今回は鳥への個人の趣味に埋没する医師の顔や看護師の関わりの遠さが間接的に少女を自死に追い込んでいる冷淡さが逆に足を引っ張った。父親へのコンプレックスが示され、「負け犬」という視線で見下す父親が会いに来ると言うことを聞いて自死するその理由の、深い位置での事情が示されていないところにやや曖昧な不足感が残る。これらが真に一つの方向を向いて焦点を示されれば、より完成度は高まっただろう。力量はあるので、また気を取り直して意欲作に挑戦してほしい。

「まほろば賞」となった飯田労氏の「破れ蓮」は、現代版「母殺し」の小説である。筆者の確かな筆致によって、介護を受ける認知症の母親を殺さざるをえなくなる過程がしっかり描かれている。その流れに淀みはない。妻の離反、彷徨、便の処理、叫びと、殺しへ追い詰められていく悲劇性は確かに収斂している。これはまた、この過程で不思議な普遍的共感を呼び寄せてくる。それは現在の日本において、同じような立場に立たされ、殺意と忍耐と愛情の間を揺れ動いている人たちがたくさんいることの共鳴である。それは大きなものとして鳴り響きつつ、もう一つ躊躇いのうちに別な眼差しをも投げてくる。自分の母親を「バアバ」と簡

単に呼んでしまうその命の関連の希薄さ、母親の頭を湯船に押さえ込む自分の手の力の虐待性――それらはある一線を超えてしまう罪悪の欠如を伴って、親子の根本を腐食させる。主人公は最後に死んだ母親に誘われるように蓮池の泥沼に吸い込まれるのだが、最も重要な親子の間の尊厳に、迫り切っていない恨みが残る。より広がりを感じさせる側面と、何か重要なものが置き去りにされている不足感とが、背反しているところにこの作品の特徴がある。

特別賞となった渡辺光昭氏の「狐火」は、バス停で待つ人に順番を譲っていく奇行の持ち主の人物像が妙に生々しく、不思議な存在感を持っていて、つい引き込まれて読んでしまう。また精神病院で亡くなる伯母の「暁子」の存在も魅力があり、学生服を来て家に勤め先から逃れてくる狂気の端緒も鮮烈に残る。風変わりと狂気の系譜がここには確かに流れており、それが生きる過程でつねに足元に覗いているその危うさも、主人公を通して迫ってくる。最後は狐火の炎の舞に呑み込まれていくのだが、最後まで狂気に逃れていった伯母と火事でわからなくなった奇行の男の像が焼き付いて離れない強い残像を持った作品である。

後味の良さは鴨居諒氏の「夢の岸」が一番で、夢と現実のあわいが見事に描かれていて、生命というつねに揺れ動いている表象の浮薄性と流動性が浮かび上がってくる。竹藪も台風も草も木も、みな命の表象としてうねり動いているその万象の命の模様が感じられるところに、この作品の妙味がある。夢のつながりは生命のつながりとして巡り動いている鼓動が聞こえてくる。この作品は特に三田誠広氏が高く評価し、「三田誠広賞」を授与された。三田氏がここまで支持したのは、初めてである。祝意を表したい。

小網春美氏の「しずり雪」は元会社の上司の癌末期の看取りをする女性のストーリーで、随所に見られる確かな叙述が経験によって磨かれた光を放っている点に魅力があった。男女に存在感がある。年齢差や財産の引き継ぎにややもたついた筆跡も感じられたが、「しずり雪」という魅力ある言葉を選ぶ感覚や、旅行会社の世界を的確に描く実社会の重みを備えている点でも、評価が高かった。特に中上紀氏と小浜清志氏がこの作品を買って、河林賞に推挙した。

今回から、「まほろば賞」は、徳島県三好市の「富士正晴同人雑誌賞」を引き継ぐ形で始まった全国同人雑誌賞と並ぶ大きな賞となり、いっそう重みが増したように思う。実質的に「まほろば賞」のこれらの作品は昨今の芥川賞作品よりも優れている。インパクトもある。今夏の芥川賞二作品も読んでみたが、ぬるくてボケている。同人雑誌に拠って創作に励む作家は、そんな作品を踏み倒し、「自分が日本文学の流れを変える」くらいの意欲を持って、新たな力作を発表していってほしい。

現実から逃げてみた先

中上 紀

なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマーの旅」（集英社）を上梓
同年「彼女のプレンカ」（集英社）
ですばる文学賞受賞
「悪霊」（毎日新聞社）「いつか物語になるまで」（晶文社）「夢の船旅―父中上健次と熊野―」（河出書房新社）「アジア熱」（大田出版）「シャーマンが歌う夜」「水の宴」（集英社）「海の宮」（新潮社）「熊野物語」（平凡社）「天狗の回路」（筑摩書房）など著作多数

今年もまほろば賞の選考に参加させていただいた。去年に引き続きコロナ禍での開催であったから、人恋しさがひときわ募り、会場で選考委員の三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各氏にお目にかかるのが楽しみでならなかった。この日に語り合った小説五作品も、例年以上にレベルが高く、素晴らしいの一言だった。疫病という怪物は、もはや日常生活に当たり前のように横たわるようになったが、文学だけは脅かすことはない。まざまざと感じた選考会だった。

さて、そうは言いつつも、選考そのものはかなり難航した。なぜなら、五作品それぞれが、まったく異なる切実さのある、重々しいテーマを抱いているのである。私自身、最後の最後まで悩み、推すべき作品を決められないまま、選考会に臨むしかなかったくらいだ。かくしてお聞かせいただいた各先生方のお話は、すべて納得が行き、かつ勉強になるものばかりであったが、同時に何れの作品にも受賞の可能性があるということを逆にはっきりと突き付けられ、結果さらに決断を迷うことになった。投票は一回目では決まらず、二回目でようやく決定という経緯であった。

以下、私の感じたことを順不同に書かせていただく。

小網春美氏の「しずり雪」は、主人公である七尾という女性の繊細な心情に心を重ねながら読んだ。七尾が最後まで看取る決心をした年の離れた男性立花は、会社の社長だけれども、同時に親のようでもあり、恋人のようでもある友人だ。特定の呼び方で呼ぶことが出来ない、この微妙な関係性のあわいに引き込まれた。人間関係は、年齢を重ねるにつれて、はっきりと名前を付けることの出来ないあいまいなものが増えていく。七尾自身も、二度の結婚に失敗し、子どもも二人いるいい年なのである。立花との生活はほとんど介護である。やがて男は結婚を求め、七尾は受け入れるが、彼には財産があった。何の計算もないなどと言ったら嘘になるが、同時に、あえて相続を了承することで立花を後ろめたい気持ちにさせないという七尾の優しさが胸を打つ。金沢の風景、そしてはじめて目にした雪の形の一つ「し

ずり雪」の描写に引き込まれた。

瀬崎峰永氏の「負け犬」では、まず病院のスタッフや患者をいろいろな鳥に例えるのが好きな個性の強い医者に目を奪われる。入院している少女が記した手記に書かれた生い立ちから性暴力を受け自殺未遂に至るまでの経緯は生々しい。幼い妹を失ったという過去や、父親と一緒に入浴した時にされた行為など、気になる部分を孕んだ父親との関係性が、綾乃の自殺で一方的な謎に書き換えられて読者に突き付けられる。途切れてしまったのは、自らの手で自由を手に入れた命が、どこかへ飛んで行ってしまったからなのだろうか。あるいは、医者の言葉のように彼女が鳥のようなのだとしたら、これは鳥葬か。

「狐火」は渡辺光昭氏の作品だ。バス停で出会った奇妙な男を追いかけていくことでふっと日常からそれた別の次元のような世界に入り込むという経緯が面白い。その男が醸し出す非日常性から、主人公は異質な存在であった自らの叔母を思い出す。出てくる人物たちみんなが狂気を孕んでいるようなエンディングには圧倒された。もちろん、一番は主人公であろう。男の家が火事で消滅し、住人が行方不明と聞いて、直也は過去の火事とそれを重ね合わせるのだが、直也が忘れたいと思っていたことを、幻想の中の叔母に告げられ、破滅していく経緯には圧倒される。

鴨居諒氏の「夢の岸」は、語り手である瀬尾の幻想が日常をじわりじわりと浸食していく形で進んでいく。大きな事件が起こるというのではないが、池に浮かんだボートであったり、庭で育てている芍薬であったり、紛失してしまった娘の人形であったりといったモチーフが、コラージュのように独特の世界を作り出している短編だ。ここにも微かなズレのようなもの感じた。厳密に言えば、夢と日常の境界を感じた。その夢の中で主人公は気付いたら「みんなが寝静まったころ何処かへ出かけ」て、夜には「その場所に戻っている」というボートに乗る。そしてたくさんの記憶の断片が現実の声のように主人公の前に立ち現れてくる。

飯田労氏の「破れ蓮」の主人公「私」は、物語の最後で蓮田に沈めた母親の胎内に還っていく。途中から、読み手が先を想像できてしまう展開ではあったが、しかしながら、補って余りあるほどの筆の力と、目をそむけたくなるほどの生への執着があった。介護と一言で言い表すにはあまりにも重い問題の中で、夫の妻は苦しみぬいた末に逃げ出した。残された認知症の母親を前に追い詰められていく「私」は、他人ごとではない。ラストシーンで、蓮の田から抜けることが出来ないのは、主人公の罪悪感の回収だろうか。レンコンの収穫の様子の描写を女体の愛撫に例えたのが斬新で、目がくぎ付けになった。

現実から逃げ出した先を覗き見るように読み終えた五作だった。

第15回まほろば賞選考会風景　2021.7.25 大田区民プラザ会議室で

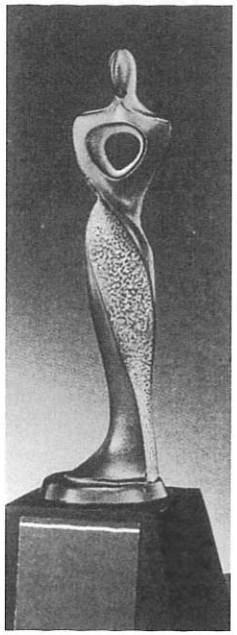
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。（二〇二一年改訂）

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



まほろば賞
「破れ蓮」
飯田　労

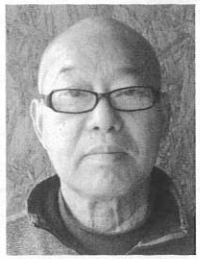
まほろば賞　受賞の言葉　飯田　労

現在七十二才の私は妻と共に九十三才の母の介護をしています。同時に通所介護の送迎運転手もやっています。仕事としての介護の私は「寛容と忍耐」という言葉を心に持ちます。それが親と子となると血の濃さゆえか感情の乱れ（疲労・絶望・暴力・殺意）が生じます。あとは行動に移すか、とどまるか。

何時、作中の主人公と作者の私が入れ替わるかも知れない、といった懸念を抱きながら、私はこの作品を書きました。

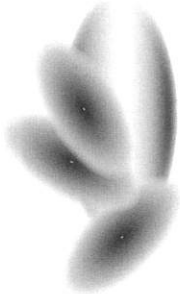
今迄良くして頂いた皆様の顔が浮かびます。

ありがとうございました。



飯田　労　いいだ　ろう

1949　金沢生まれ
本名　飯田誠治
同人誌「渤海」「彩雲」を経て
現在「じゅん文学」同人
金沢在住



まほろば賞は、読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は寄付金合計金額は49000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。全国同人雑誌振興会

特別賞
「狐火」
渡辺光昭

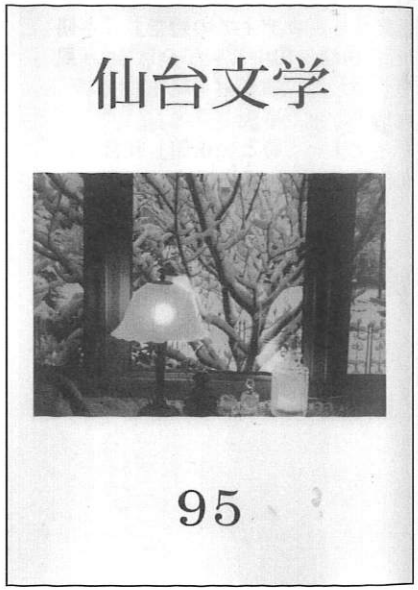
特別賞　受賞の言葉　渡辺光昭

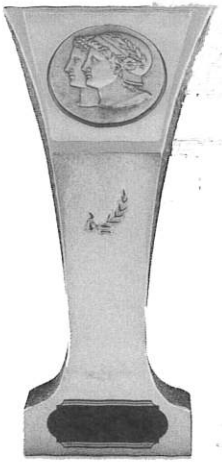
この度は、全国同人雑誌特別賞をいただき、ありがとうございました。同人誌「仙台文学」に参加して、二十数作を発表してきましたが、どれも自己満足の域を抜け出せませんでした。いったい今の自分の実力はどの辺りにあるのか分からず、手探りの状態でした。この度、願ってもない評価をいただき、自分のこれからの歩むべき方向性がより確かなものになりました。まだまだ未熟なところが多く、満足のいく作品に到達することは至難の業ですが、さらなる高みを目指して一歩一歩努力を積み重ねていく所存です。

ありがとうございました。

渡辺光昭　わたなべ　みつあき

1949　宮城県生まれ
宮城教育大学教育学部卒業
東北学院榴ケ岡高等学校国語教諭
「仙台文学」同人
宮城県芸術協会会員
著書『いつか水色の橋を渡って』（近代文芸社）
『起こすか？　戻すか？』（文芸社）
『停留所』（編集工房）



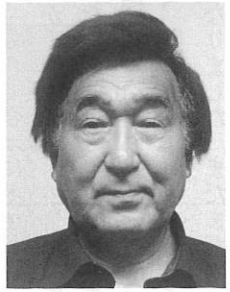


三田誠広賞
「夢の岸」
鴨居　諒

三田誠広賞　受賞の言葉　鴨居　諒

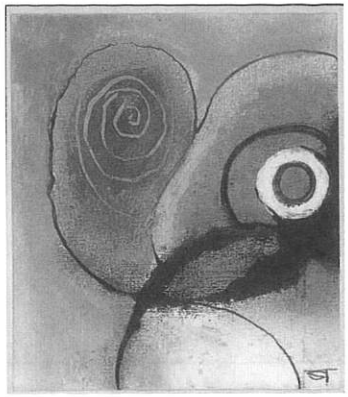
候補作に入れてもらっただけでも光栄に思っていたところ、思いがけずこのような賞をいただいてたいへん嬉しく思っています。しかも三田誠広さんにこれほど高い評価をしていただこうとは想像もしていませんでした。

昔は書くときに変な気負いのようなものがあったのですが、今はどんなささやかなテーマ、モチーフでもできるだけ丁寧にすくいあげて、言葉にしていこうという、書くと言うことに対しての以前とは少し異なる、自然な心持ちがあります。そんな姿勢もよかったのかもしれません。ありがとうございました。



鴨居　諒　　かもい　りょう

1949年生まれ
同人誌「中津川文芸」主宰
短歌誌「彩雲」代表
歌集「アルカディアの碧空」「冬陽坂」「山峡―田中冷灰子全歌集」「風をかたちに」随筆集「風花」
画集「時空万華鏡」
ギャラリー「詩と美術館」経営（現在休業中）



「ヒエロニムスの卵」

河林満賞
「しずり雪」
小網春美

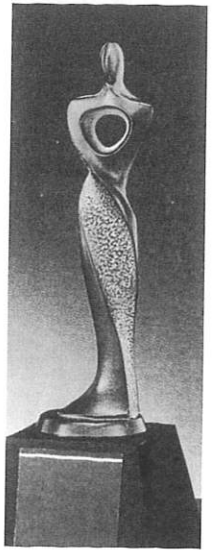
河林満賞　受賞の言葉　小網春美

多分年のせいだと思うが、最近の私の小説は「しずり雪」をはじめとして、死を扱ったものが多い。小説においても、その死に深みを持たせるには、生をしっかり描ききらなければならない。振り返って自分自身を見つめてみると、最期に、生をしっかり生ききったと言えるのかどうか。それ次第で死が違った色合いを見せる。書くことを生きがいとしてきた私にとって、河林満賞の受賞は、生きてきた一つの証となりそうだ。

選考委員の皆様に心からお礼を申し上げます。

小網春美　　こあみ　はるみ

1947年生まれ
金沢市在住
共立女子大学文芸学部卒業
高校非常勤講師として30年間勤務
同人誌「北陸文学」などを経て、2019年より「飢餓祭」同人となり、現在に至る



※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援・御協力をお願い申し上げます。

読者賞 「負け犬」

読者賞　受賞の言葉　瀬崎峰永

「負け犬」を書きながら、私を突き動かしていたのは怒りの感情でした。性犯罪被害のなかでも家族など周囲の無理解が被害者をさらに追い詰める、いわゆる「セカンドレイプ」の問題に焦点を当てた短編で、一人でも多くの人に読んでほしいと念じながら七転八倒して書き上げました。

このたび思いがけず「文芸思潮」誌上に掲載していただいたおかげで「ふくやま文学」の読者ではない方々にも本作品を読んでいただく機会を得られましたこと感謝しております。貴誌面をとおしてお一人でも多くの方々に本作品をお届けできれば幸いです。

瀬崎峰永

せざき　ほうえい

1968広島県生まれ

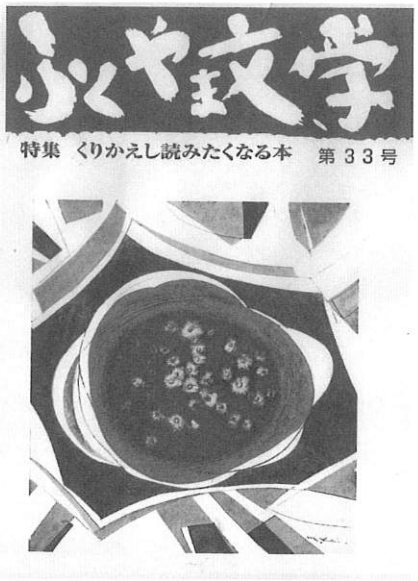
中京大学文学部国文科卒業

卒業論文は金子光晴詩集『人間の悲劇』論

97「ふくやま文学」参加

2004年「アビよかえれ」で第36回中国短編文学賞一席受賞

20年「カラスどんぶり」で第50回九州芸術祭文学賞佳作入選



第15回 まほろば賞　読者賞 投票集計

作品名 / 投票者	負け犬	しずり雪	狐火	夢の岸	破れ蓮
木内是壽					30
今田真理子	6	10	10	10	10
山田真己乃		10			
渡辺恵理	15		20		
西田宏明	50				
渡辺正樹	40			10	
夏目由美			20		
外山寛子			30		
山口映子				20	
渡辺　聡	50				
志村　譲	18				
寒河江仁	31				
弓田　肇	50				
山本雅治	20				
木村弥一	30				
計	310	20	80	40	40

●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は右のような結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

各作品寸評

●「しずり雪」は題材が良いと思いました。今回、どの作品も素晴らしく、実力が伯仲しているように思います。文章だけをとって見れば「夢の岸」の方が上かとは思いました。（山田真己乃）

●「破れ蓮」は、圧巻。現代の「楢山節考」である。現代の真の問題がここにある。（木内是壽）

●どれもみんなよかった。「負け犬」は女性にとっては、ちょっと引くところがある。（今田真理子）

●「夢の岸」は、あちらの世界とこちらの世界とを繋ぐ不思議な領域を鮮やかに示してくれている。ほんとうにこんな世界がありそう。魅力がある。極上のワインの味わい。（山口映子）

●「負け犬」はすごい作品。これがどうして「まほろば賞」にならなかったのか、不思議でならない。このインパクトが一番強かった。現実を直視した冷め切った描写は、この作者でなければ書けないものだ。今、こんな作家はいない。これからもこの作家には注目したい。次にどんなものが出てくるか大いに期待している。（弓田　肇）

ふくやま文学 32号

負け犬

瀬崎峰永

院内自死事例（福山救命救急センター）

■自死者・吉永綾乃（十九）女性

■入院までの経緯・二〇一九年八月二六日、自宅にて炭酸リチウム錠の多量摂取及び縊首にて自死企図するも、NPO法人職員に発見され当院に救急搬送。ただちに当直の鈴木内科医が胃洗浄及び血液透析治療を施す。翌二八日、措置入院手続完了。血清リチウム濃度平衡を図るため内科治療を継続しながら精神科に転科。担当医・精神科医師佐々木直純。

■身体疾患・なし

■精神症状・二〇一八年九月にうつ症状の主訴あり福山市内の精神病院に三ヶ月間通院後、当人意思にて十二月通院中止。二〇一九年八月、心的外傷後ストレス障害に起因する侵入性解離症状により当院に救急搬送。

■薬物使用もしくはアルコール摂取・なし

■配偶者・未婚

■自死企図既往・なし

■その他危険因子・家庭、主自身のパーソナリティ共に問題みられず

二〇一九年九月二日、院内（病室）にてガラス片を用い頸動脈を裂損。応急処置を施すも外傷性頸動脈損傷による出血性ショックにて同日夕刻死亡。

自殺未遂で救急搬送された吉永綾乃が、物理的治療のち精神科に転科したのが八月二七日。精神科の担当医は佐々木直純（三五）であった。

佐々木医師は同日午後、山本文香看護師長、井上小百合ソーシャルワーカーを伴って患者の個室を訪れていた。血液透析治療後で患者は睡眠中であった。当日は曇っていた。カーテンを開けていたが日は射さなかった。かすかに外のクマゼミの声が漏れ聞こえていた。佐々木医師は患者の顔を覗きこみ脈をとった。

「あれだな、この患者はツバメチドリに似てるな」

山本看護師長も井上ソーシャルワーカーも眉をひそめた。八月下旬は干潟にシギ・チドリの集まる時期だ。

「なあ、あれが見たい」

佐々木医師が山本看護師長を振り返った。山本看護師長はうなずいて、患者のベッドのそばに立った。

「あれですね」

山本看護師長が布団をめくり、患者の右腕をそっと伸ばして病衣の袖口を肩までめくってみせた。患者の腕は白く細かった。その右腕の、肩から肘までの二の腕の位置に刺青があった。青い大きな肉筆文字で「負け犬」と彫ってある。

佐々木医師は軽く口笛を吹いた。

「ね、先生、おかしいと思いませんか。本職のコーディネイターならどんな字体でも自在に彫れるはずですのに、わざわざこんな下手な肉筆文字を彫るなんて」

メディカルソーシャルワーカーの井上はそう指摘した。

しかし佐々木医師は、それには答えず患者の左手首を確認した。蛇のような傷跡が何重にも醜く走っていた。佐々木医師はそれが癖の頭をぽりぽり掻いたあと、白衣のポケットに両手を突っ込んだ。

「ツバメチドリといえば、もう七年くらい見てないな。昔は休耕田とかでよく観察できたのに」

山本看護師長が一つ咳払いをした。

「内科の鈴木先生からの申し送りです。縊首して発見されるまでの時間によっては後遺症に高次脳機能障害の残る可能性があるとのことです」

病衣の袖をおろし、山本看護師長は患者の腕を布団の中にしまった。

「鈴木先生？」佐々木医師は振り返った。「ああ、あのタマシギそっくりの太って汗臭い内科医な」

山本看護師長がまた咳払いした。佐々木医師は井上に顔を向けた。

「身寄りは？」

「発見者のNPO法人職員から家族へ連絡をとってもらっ

ていますので、おそらく今日中には」
「できるだけ情報かき集めておいて。なんならそのNPOの職員に来てもらっていいよ。それと、当面は医療関係者以外、患者への面会は禁止な」
医師は山本看護師長にも顔を向けた。
「覚醒して、まだ興奮しているようだったら鎮静剤打っといて。とにかく眠れるだけ眠ってもらおうよ。食事が取れないようなら、しばらく点滴で様子みて」
ひと通りの指示を終えると、佐々木医師は眠っている患者の顔を覗き見た。
「オーバードースに首吊りか。顔は可愛らしいのに過激なお嬢さんだ」

翌二八日朝の回診時、佐々木医師に付き添って、井上は覚醒している吉永綾乃の病室を訪ねた。綾乃はベッドに仰向けに臥せっていたが、医師を見るとゆっくり上半身を起こした。井上がベッドをギャッチアップさせ、ベッドと患者の背中のあいだに枕を挟んだ。
佐々木医師はベッドの傍らの丸椅子を引き寄せて腰掛け、まず自己紹介を行い、それから患者の名前と年齢を確認した。
「吉永綾乃。十九歳です」
綾乃の発語には舌がもつれるような調子がみられた。
「気分はどうですか」
「だるいです」
「薬が残っているせいだね。心配はいりませんよ。痛みは?」
「ありません」
佐々木医師が脈を診ているあいだ、綾乃は白い掛け布団の一点をじっと見据えていた。
黒くまっすぐな長髪で、眉が細く長い。くっきりとした二重まぶた、射るような強い眼差しは印象的で、なるほど前日の夜、井上がスマホで見たツバメチドリの眼を思わせた。顎の線は細く尖っている。長身で細身、病衣の下の胸もとは薄い。上半身を起こしたときに乱れた髪をまとめるより先に素早く襟元を整えた様子を見ても、隙のない性格がうかがえる。
佐々木医師はゆっくりした語調で、綾乃の表情をうかがいながら質問した。
「吉永さん、水曜日の午後に安定剤を過剰に服用したあとで首吊り自殺を図ったんだけど、憶えてるかな」
綾乃は布団の一点に目を置いたまま、小さくうなずいた。幼稚なうなずき方でなく、成熟した大人の女性のうなずき方だと、井上は感じた。
「ずいぶん念の入った自殺方法だよね。思いつきで衝動的に、つまり発作的に首を吊ったわけじゃなく、熟慮した上

での自殺未遂だ。そうじゃない?」
綾乃はまたうなずいた。
「結構。ところで、まあ運良く、と言っていいかな、きみはそれでもこうして助かったわけだけど、どうだろう、まだ死にたいと思ってるかな?」
ここは大事な質問だ。井上は、佐々木医師と綾乃の両方の表情を代わる代わる見た。綾乃は口をかたく結び、布団の一点にじっと目を据えている。佐々木医師は回答を待っている。オオタカが獲物を狙うような鋭い眼光だ。沈黙が長かった。佐々木医師が重く息をついた。
「まだ迷っている、というところかな?」
綾乃は首を横に振った。
「退院したらまた死のうと思ってるわけだ」
医師の言葉に綾乃はうなずいた。救命した医療従事者からすればがっかりする反応だ。しかし、佐々木医師は口角を上げた。
「ありがとう。正直に話してくれて助かるよ。これからも何でも正直に言って欲しいな。眠れない、食事がまずい、佐々木先生の息が臭い、なんでもね」
最後は軽口をたたき佐々木医師は明るく笑ったが、綾乃は相変わらず布団の一点をみつめたまま黙っていた。
「吉永さんがどうして死のうと思うに至ったのか、たぶん、いろいろな原因があると思うんだけど、その中の一つでいい、自分でもはっきりわかっているような理由があるなら教えてもらえるかな」
沈黙。
「一言じゃ言えないかな?」
沈黙。
初回の問診はこんな具合で不調に終わった。佐々木医師はしきりに頭を掻いていた。
その日の午後、ホームレス支援のNPO法人「おにぎりの会」の森氏が来院した。前年十二月から吉永綾乃を担当している、笑顔の愛らしい、ふっくらとした三十代の女性相談員である。森氏の来院を受けて井上は、院内の面会室で臨時の担当者カンファレンスを提案した。出席者は佐々木医師、森氏、山本看護師長、井上のほか、鈴木内科医もその大きな体で議場の一席を占めた。

（井上SWのカンファレンスメモより）
吉永綾乃（以下主と表記）は二〇一八年十二月四日、春日町の公園で「おにぎりの会」の活動中に発見された。
主は市内県立高等学校三年の二〇一八年九月にレイプ事件に遭遇し重度のトラウマ障害を抱える。その後、家族とのトラブルから知人宅を転々とし、交際相手（建設業アルバイト・南蔵王町）と短期間同棲、その後離別し、十二月一日から同公園のトイレで寝起きしていた。

同会のシェルターに保護し、森氏同行にて福山市の生活困窮者支援センターに登録。支援計画担当は若井相談員である。「おにぎりの会」を保証人として沖野上町の民間住宅の一室を借り、主は十二月二八日から単身生活を開始、翌年四月二〇日新涯町の民間アパートに転居する。

二〇一九年一月四日、主は給食会社（曙町）にて週五日六時間の就労開始。時給は八五〇円。試用期間経過後の四月から時給が九五〇円、勤務時間もフルタイムとなる。就労しながら調理師免許の取得を目指していたが、レイプ事件のフラッシュバックにその後もたびたび襲われ、八月十一日、就労中に意識消失を起こして当院へ救急搬送、緊急入院となる。入院期間は七日間。入院中に主は給食会社を自主退職した。

退院後、通院治療の必要あるも、主はこれを拒否し自宅で引き籠もり状態の生活となる。二七日午後、訪問した森氏が、主の郵便受けにDM等が溜まっていたことから合鍵で主宅へ緊急突入、縊首状態の主を発見した。

家族は、父（五二・食品製造業管理職）、母（四九・食品加工場パート職員）、主の三人世帯。住まいは東深津町の一軒家（父の持ち家）で、近隣に主の祖母（七八・父の母）が住む。レイプ事件被害直後から主は外泊が多くなり、九月頃から帰宅しなくなった。

森氏の報告した「レイプ事件」がカンファレンス出席者一同の注目するところとなった。しかし森氏もこの件については詳細を把握しておらず、事件のあった二〇一八年九月に学校からの帰宅途中で事件に遭遇したこと、事件後、三日間だけ母親同伴で通学したのち高校を自主退学したことが報告されたのみだった。

「患者の両親に面会したことは？」

重い沈黙に包まれた面会室で、とつぜん佐々木医師が森氏に質問した。

「あ、いえ、電話で連絡したことはあるんですけど、会ったことは一度も」

森氏は、少し戸惑ったようにそう答えた。

「夫婦仲は？」

「さあ、そこまでは」

「今回の自死未遂について、両親は何と言ってますか」

「おかあさんの方ですが、もうびっくりした様子で言葉を失っていました。そのあと、おとうさんが電話口に出て、すぐに娘に会わせてくれと噛みつくように言いました。もうすごい剣幕で。面会謝絶であることは伝えておきましたけど……」

「納得してない、でしょうね」

「そうですね。その後も何度も事務所におとうさんから電話がありまして、娘に会わせろ、病院を教えろ、もし何か

あったらおまえたちの責任だ、としつこく怒鳴られました」

「申し訳ありませんが、本人から話を聞き出すまで、もうしばらく面会を断って下さい。たいへんでしょうけど」

カンファレンスの後、頭を掻きながら廊下を歩く白衣の佐々木医師に、井上は追いついた。

「先生は、患者の自死未遂の一因に、両親が関係しているとお考えなのですね？」

「うーん」

佐々木医師は、はげしく頭を掻いた。「あのNPOのお嬢さんだけど」

「森さんですか。きれいな人ですよね」

「チュウシャクシギに似てるよな」

「はあ？」

井上は、思わず佐々木医師を見た。

「こう、体が大きくて、首が長くて、今にもホーイピピピ、と啼いて飛んで行きそうで」

「カンファレンスの間、そんなこと考えてたんですか？」

まじめに話をするのがばかばかしくなってきた。

「よほどバードウォッチングに行きたいんですね」

「休みがとれないんだ」佐々木医師は悩ましそうに言った。「この分だと一度も干潟へ行かないうちに、シギ*チのシーズンが終わってしまう」

「あきれた」

だが脱力したその拍子に、井上の脳裏に一つの考えが浮かんだ。このままでは綾乃は口を開かないだろうし、粘着質な父親がこの病院を探り出すのも時間の問題と思われる。ただ井上の思いついたその考えは、ほんの少しだけ危険を伴った。

翌二九日朝の巡回にも、井上は佐々木医師に同行した。綾乃は前日同様黙秘を守った。やっぱりね。井上は決心した。

午後になって、井上は単独で綾乃の病室を訪ねた。その手には五〇枚つづりのレポート用紙一冊と新しい黒のボールペンが一本あった。吉永綾乃はベッドに横になったまま、窓の外を眺めていた。空には鈍い明るさがあった。ハトが七羽、ビルの上を飛んでいるのが小さく見えた。入ってきた井上を見ても綾乃は起きなかった。その代わり、少し安堵したような笑みがその頬に浮かんだ。

「どう？　ご飯は食べられた？」

「はい」

笑みを浮かべたまま綾乃は井上をみつめた。

点滴スタンドのほかこれといって医療器機のない、ベッドと備え付けの棚があるばかりのがらんとした病室は、一日籠もっているには退屈だろう。病室の壁と同じ色のうすいベージュ色のカーテン。建物ばかりの窓の風景。病室にテレビはあるが綾乃はテレビカードを購入していなかっ

＊注／シギ・チドリ類の略。旅鳥で春と秋の短い期間しか日本にいない。

た。本も雑誌も読んでいる様子はない。病衣は洗濯したらしく綾乃が身につけているのは「おにぎりの会」の森氏が差し入れた白いTシャツと白い短パンだった。井上はベッドわきの丸椅子を引き寄せ腰をおろした。

「ね、吉永さん、ここだけの話、あなた佐々木先生が苦手じゃない？」

井上の不躾な質問に綾乃は何も言わなかったが、笑みをいっそう深くしたので、答えはＹＥＳだ。

「先生のどんなところが苦手？　男性だから？」

「いいえ。ただ、目がこわくて。さっさと吐け、すぐに決めろと、答えを急かされてるような気がして」

まだ薬が抜けていないのだろう。舌のもつれた話し方だった。

「気にすることないのよ。あの人、早く休みをとってバードウォッチングに行きたいだけなんだから」

「バードウォッチング？」

綾乃が目をまるくした。井上はうなずいた。

「鳥が好きなの。あなたのこともツバメチドリと呼んでたわ」

綾乃が噴き出した。井上は、その笑顔をかわいいと思った。

「ねえ、吉永さん」井上は身を乗り出した。「先生に直接話すのが難しいなら、手紙に書いてみない？　高校三年生だったあなたに何があったのか、どうして自分から命を絶とうとしたのか、今はどんな気持ちでいるのか。思う存分書いてみたらどうかしら。あなた、文章書くの得意でしょう？」

「どうしてそう思うんですか？」

「勘よ」井上は自分の頭を指差した。「あえて説明すれば、あなたは言葉を省略して使わないから文章で物を考える人だと思っただけ。でも、外れてないでしょう？」

綾乃は笑みを浮かべただけで、合っているとも外れているとも言わなかった。井上は持参したレポート用紙とボールペンを棚の上に置いた。

「明日の朝取りに来るから、それまでに書いておいて。いい？」

立ち上がって病室を出て行こうとする井上を、綾乃が呼び止めた。

「ツバメチドリって、どんな鳥ですか？」

「ツバメを大きくしたような姿のチドリで、長い尾が二つに分かれていて、動作がとても早いの」井上は振り返って答えた。「スマートでとても賢そうな顔をしてるわ」

にこりと笑って井上は病室を出た。

自傷他害のおそれのある患者にボールペン等の先の尖った物を手渡すのは危険な行為だ。あとで問題になるかもしれない。病室を出たあとで弱気になる自分を井上は感じた。

翌三〇日朝の回診時、綾乃の病室の、棚に置きっぱなしになっているレポート用紙を井上はめくってみた。見事に全部白紙だった。棚にボールペンは見当たらなかった。井上はベッドの綾乃を見たが、綾乃は視線を合わせようとしなかった。井上はつとめて表情を変えず佐々木医師とともに病室を出たが、さすがに肩を落とした。勝手に期待をした自分が愚かなのだと思ってみても、裏切られたような寂しさは拭えなかった。

だから、翌週月曜日、九月二日朝の回診で、小さな字でびっしり書き込まれたレポート用紙をみつけた時、井上は思わず声をあげてしまった。ボールペンはそこになく、気になったものの、診察中の綾乃に声をかけるのが憚られた。井上は佐々木医師にみつからないようこっそりレポート用紙だけ回収した。

地域連携室の自分のデスクにもどった井上は、頻繁にかかってくる電話に邪魔されながらも、綾乃の手記を読み進めた。読み終わったのは昼休憩の五分前だった。井上はレポート用紙をつかんで立ち上がった。精神科の診察室で佐々木医師は診察中だった。午前の診察時間は終わっていたが、診察待ちの患者がまだ六人ばかり残っていた。井上は医師控え室で綾乃の手記を読み返しながら診察が終わるのを待った。午前中の診察がすべて終わり控え室に戻ってきた佐々木医師は、回診のときに比べてひどくやつれて見えた。立っている井上を見て佐々木医師はつぶやいた。

「アオアシシギ……」

「はあ？」

「あ、違った。井上君か。何か用？」

重症だと井上は思った。

「先生、これ」

井上がレポート用紙を差し出した。

「んー？　なにこれ」

「吉永綾乃の手記です」

佐々木医師の表情が変わった。ひったくるようにレポート用紙を受け取ると、デスクの椅子をひいて腰かけ、急いで目を通し始めた。

井上さん、私全然文章書くの得意じゃないです。それにどう書いていいかわからなくて悩みました。でも金曜日の朝井上さんは白紙のレポート用紙を見て悲しそうな顔をしたでしょう。私のせいでまた人を傷つけたと思うと辛くなりました。だから今日までのこと書きます。読みにくい文章でも怒らないで下さい。

森さんから私のこといろいろ聞いたと思います。家族はパパとママと、私、それから妹の優佳がいましたが、妹は三歳で車にひかれて死にました。だからパパは妹の分も、私をすごく可愛がってくれました。パパが私をあんまり可

愛がるのでママはいつも私にやきもちを妬いてました。中二までパパとお風呂に入りました。パパとお風呂に入るのは正直好きじゃなかったです。お風呂の中でキスされたり胸を触られたりするのが嫌だったからです。短い髭の生えたパパのアゴが私の顔に触れたりするとチクチクして背中に虫の這うような気持ちになりました。それでママに話すとその晩パパとママは喧嘩してそれからはパパも遠慮してくれるようになりました。私が一人でお風呂に入る時パパは悲しそうな顔をしました。その顔を見るといつも辛くなりました。パパは肉を加工する工場で働いていて私が中三の頃に工場の支配人になって帰りが遅くなりました。でもそれからもパパのやさしさは変わりませんでした。高校に入学して駅まで自転車で通学する私のために新しい自転車を買ってくれましたが、それを選ぶのにパパは自転車店の店員を怒鳴ったり叱りつけたりしてそばにいた私はいたたまれない気持ちでした。でもそのくらいパパは私が可愛いのだと嬉しくもありました。クリーム色のかわいい自転車が私のものになりました。高二で進路を決めなくてはいけなくなったとき私はパパの期待に応えたくてパパの希望どおり家から通える大学への進学を選びました。パパは自分が高校生のとき理工系の大学を目指したのですが、不運にも受験に全部失敗して高卒で苦労したと言ってました。だからパパのために理工系の学科を志望しました。高三の九月に全国模試がありました。結果が返ってきた時私は跳び上がりました。志望校の合格判定がAだったからです。帰ってパパに報告するのが楽しみでした。学校から松永駅までの道を級友のあんなちゃんと一緒にお喋りしながら帰っていました。あんなちゃんとの話題は好きなジャニーズのことと決まっていましたが、頭の中ではジャニーズどころじゃなくて私はパパの喜ぶ顔ばかり思い浮かべていました。でも途中で私たちは大塚君に会いました。大塚君はあんなちゃんの彼氏で自転車通学でした。あんなちゃんが大塚君と帰りたそうな顔をしたのでそこで別れました。あんなちゃんが大塚君の自転車に二人乗りして帰るのを見送ってから私は松永駅までの道を一人で歩きました。

田んぼの中の細道を抜けて古い商店のならんだ車道に出てそこで私は一人のすごく太ったおばさんを見かけました。おばさんは白杖を手にして歩いていましたが、それは見ていて不安でした。たぶん失明したばかりだったんだと思います。歩道と車道の段差に気付かず片足を踏み外したり蛇行しながら歩いて車道にふらふら出て行ったり側溝に足を落としそうになったりしてました。おばさんはまだ五十代くらいに見えましたが、腰も少し曲がっていて歩き難そうでした。私はおばさんに声をかけました。バカでした。今は後悔しています。このおばさんが怪我をしようと車にひかれようと知らん顔をして帰ればよかったんです。

でもそのときは模試の結果が良かったのでつい親切な気持ちになってしまいました。病院から家へ帰る途中だと言うので私はおばさんを家まで送り届けることにしました。おばさんは感じのいい人で私の親切を断ったりしないで受け入れてくれて無事家に着くと高校生の私にすっごく丁寧にお礼を言ってくれました。おばさんの家は商店の通りから一本奥に入ったところにある二階建ての一軒家で、小さな開閉式の門があって雑種だと思うけど一匹の犬がおばさんを見て尻尾を振りました。私はペットを飼ったことがなくて頭が悪そうできゃんきゃん鳴く室内犬を見ても腹が立つだけで、かわいいなんて一度も思ったことはありませんでしたが、おばさんの家のぴんと耳の立った賢そうな庭犬は一目で好きになりました。おばさんの家から駅までまったく知らない道を歩くことになりました。それは公園のそばを通る木陰の道で公園には何組かの親子連れがいて小さい子どもが笑いながら駈けっこしていて、おかあさんたちはお喋りしていました。パール色のトヨタ・ハイエースが一台道の隅に停まっていました。人に良いことをした高揚感で私はスキップしたい気持ちを抑えながら歩いていました。私が公園のそばを通りかかったとき停まっていたハイエースの運転席から大きくてマッチョな男の人が降りてきました。スキンヘッドで黒い生地に白い横文字のプリントがある半袖のTシャツとグレーの短パンという姿で太い脚は脛毛が濃く白いスニーカーのかかとをサンダルのように潰して履いていました。年齢はわかりません。二十代と言われればそんな気もするし四十代と言われればそんな気もします。とにかくヤバそうな男だったので私はハイエースが停まっているのとは反対側の道端に寄って歩きました。すると男が近寄ってきました。「ねえ、ごめん」と低い声で話しかけてきました。何がごめんだろうと振り返ったらいきなり拳骨で頬を打たれました。私は道に倒れました。男は私の髪の毛を乱暴につかむとハイエースの後部座席までひきずって歩きました。私は気が狂ったみたいに大声をあげて助けを求めました。男は私のアゴを拳で殴りました。「ごめん」と男は言いました。恐かったのかもしれませんが公園にも商店にも人はいたのに誰も助けに来てくれませんでした。男はハイエースの後部座席のドアをスライドさせ私を中に乗り込ませようとし抵抗すると鼻を殴って「ごめん」と言いました。男は私を後部座席にほうりこむと運転席にもどってエンジンをかけました。ミスチルの楽曲が大音量で流れだしました。後部座席の窓は黒いカーテンで覆われてました。口の中は血の味でいっぱいでした。ドアがロックされ車が動き出しました。私は後部座席に倒れていました。全身が痛かったし何より恐怖で体がすくんでしまって金縛りにあったみたいでした。指を動かすことも恐くてできませんでした。車の中は芳香剤のにおい

に混じって汗のようなつんとするニオイで充満していました。吐き気のするニオイでした。車が停まったのは十分くらい走った後だったと思います。男はエンジンをかけたまま音楽もつけっぱなしで車の中をとおって後部座席に移動してきました。ごめんごめんと男は言いながらポケットからスマホを取り出して私を起き上がらせて顔を平手で何度もこっぴどく打ちました。耳がきーんと鳴って聞こえなくなりました。鼻血が顔に垂れたのがわかりました。目が開きません。どうにか薄く目が開いたとき男は私の顔をスマホでじーっと撮っていました。それから私の制服のスカートをまくり下着をスマホで撮ろうとしました。私が両脚をきつく締めたら「ごめん」と言ってまた拳骨で頬を殴られました。私はシートに倒れて気が遠くなりました。抵抗できなくなった私の脚をひろげて男は「ごめんごめん」と言いながらスマホで股間を執拗に撮りました。パパ助けて。声は出ません。心の中で必死にパパを呼びました。パパすぐに来て。助けて。男はスマホを片手に下着の上から指を何度も這わせてそれからスマホを一度置いて両手で私の下着を膝までおろしました。それからまたスマホでしばらく撮影して私がのろのろと手で隠そうとしても邪険にそれを払いのけました。二度目に隠そうとすると髪の毛をつかまれ起き上がったところを裏拳で右目の上を殴られました。「ごめん」もう悲鳴も出ませんでした。黙ってシートの上に伸びていました。カチャカチャと金属の音が聞こえました。男がズボンを脱いでいるのがわかったので逃げようと心は思うのですが体が動きませんでした。膝が高く持ち上げられ男が入ってきました。皮膚と肉の裂かれるような激痛で狂いそうでした。男は片手でスマホを持ったまま「ごめんごめん」と言って乱暴に動き車が大きく揺れました。私の体は丸太のように動かずもう自分のものではないみたいでした。私はパパが助けに来てくれることだけを念じました。私がこんな目に遭っていることをパパが知らないなんて悲しすぎました。男が変な声を出してコトは終わりましたが抜いたあとも男は執拗に私の股間をスマホで撮ってました。ようやく車の外に連れ出されて男とハイエースが去って行った時には空はもう暗くなっていました。赤味をおびた残光が空の低いところに漂っている松永湾の景色を高いところから眺めながら私は途方に暮れていました。よかったじゃんと私は自分に言いました。殺されなくてよかったじゃん。東日本大震災の時あるタレントの言っていた「生きてるだけでまるもうけ」という言葉が頭に浮かびました。殺されなくてよかったよかった。このくらいのことで私は負けはしない。あんなやつに傷つけられたりしない。そしてこう自分を励ましました。早く家に帰ろう。やさしいパパは私がこんな傷だらけなのを見たらびっくりして急いで走ってきて私を抱きしめてくれる。世界中の暴力

から私を守ってくれる。ここで泣いてしまわないでパパの胸で泣こう。私が置き去りにされたのは神村町の農道でした。私は制服を整えて胸を張って農道を下って歩きました。人が私をじろじろ見ても気にしないようにしました。松永駅のそばのコンビニに入ったときも店員の青年が目をまるくして私を見ても気にしないでトイレを借りました。そしてあの男の不潔な体液を可能なかぎり洗い落としました。でも私が強気でいられたのもここまででした。トイレから出て洗面所の鏡を見た時私は絶句しました。そこに映っているのは幽霊のように血にまみれて腫れ上がった醜い女の顔でした。とても自分の顔とは思えない鏡の中の顔に私は目が覚めました。考えていた以上にとんでもない事が起こったのだとようやくわかりました。

パパは私が思っていたよりずっと弱い人でした。遅い時刻に帰ってきた傷だらけの私を見て何があったかパパはすぐに悟ってくれました。でも私を守るどころかすっかり逆上して感情的に私を叱りつけました。「隙があるからそうなるんだ」「どうして死ぬ気で逃げなかったんだ」「行きずりの男にされたい放題にされて、まるで淫売だ」パパもショックだったんです。仕方ないと思います。でも私はそれでフリーズしてしまってそれまで辛うじて持ちこたえていたものまで壊れてしまいました。翌朝ママが止めるのを振り切って私は警察へ行って事情を話しました。若い女性警官は私に「よく勇気を出して話してくれたね」と褒めてくれました。「もし話してくれなかったらまた別の人が被害に遭っていたところよ」別にほかの人のことなんかどうでもいいんです。でもパパの反応よりずっとマトモでそれで私は泣いてしまいました。それから病院へ連れて行かれてそこでいろいろ検査とか受けて昨日の男につかまった場所とか車から降ろされた場所とかを警察の人に案内して現場で説明したりして家に帰ったのはもう夕方でしたがその頃にはもうパパもママも言葉の通じない遠い人になっていました。パパは憎い者を見るような目で私を見たし、ママは私の前であからさまにため息をついたりしました。もちろん悪いのはあのスキンヘッドの男ですが、私はあの男以上にパパとママに傷つきました。一週間学校を休みました。それから三日間だけママの付き添いでタクシーを使って学校へ行きました。クラスの友だちはいつもどおり私を歓迎してくれたし心配もしてくれましたが私はもう以前のように笑えなくなっていました。事件のことは担任をとおして校長の耳に入り通学しなくても特別に単位をくれることにしてくれましたが、そんなこと意味ないと思えて私は退学を申し出ました。パパをかんかんに怒らせたのは退学のこともありますがそれ以上に事件のことを先生に話したことでした。「警察だけでなく学校にまで」とパパは怒鳴りました。「なんのためにそんなはずかしいことを

町中にふれて歩くんだ」パパの溺愛の対象だった私はいつのまにかパパにとって「はずかしい者」になっていたんです。私はただ被害者でうしろめたいことは何もないつもりでしたが、ママも「もう人に話しちゃだめよ。世間の人が変な目で見るようになるから」と私の存在を世間から隠そうとしました。私は眠れなくなって精神科に相談に行きました。カウンセリングがあってその後診察があって「うつ病」と診断され二週間分の錠剤をもらいました。パパの私に対する態度は変わってしまい、私は家にいても針のムシロでしたがあれだけ友だちが多かったのに私を泊めてくれる友だちとなると何人もいませんでした。受験準備でみんな忙しかったからです。たまに泊めてくれる人がいても一晩ならともかく二晩目となるとそのママが出てきて理由をいろいろ問い質そうとするし、私は行き場所をなくしてしまいました。そんなとき「だったらうちにおいでよ」とある元クラスメイトがＬＩＮＥをくれました。その子とは在学中そんなに仲が良かったわけじゃなくどっちかというと唇を黒っぽくして髪を染めて近寄りがたいタイプの子でした。それがエミでした。エミの家にお邪魔するとエミはなぜかとても嬉しそうでまるで親友みたいにゲームセンターに誘ってくれたりコンビニ弁当を奢ってくれたりしました。それで私もだんだんエミが好きになりました。打ち解けてみるとエミは無邪気で人懐っこくて可愛い子でした。一緒に深夜の町をうろついてガードレールに腰掛けて自動販売機で買ったペットボトルのコーヒーを飲み、一緒に部屋でカーペットにごろごろしてたまに一緒にお酒を飲んで一緒に夜遅くまでゲームして気が向いたら一緒に筋トレもしました。エミとその両親との仲はなんだか他人のようでした。同じ家に住んでいながらエミとエミの両親はほとんど顔を合わせることがなくて私がエミの家に泊まるようになってエミが学校へ行っているあいだ私が家の中でごろごろしていても何も言ってきませんでした。エミの部屋のものは壁もクッションもカーペットもジャージも下着もそのほかあらゆるものがすべて黒かピンク色でした。私が着替えに困っていると自分の下着を貸してくれることもありました。「気持ち悪くなかったら」これがほかの、たとえばあんなちゃんの下着だったら抵抗あったと思います。でも不思議とエミのものを私はちっとも気持ち悪いと感じませんでした。むしろ「どうしてこんなに親切にしてくれるの」とある晩私はたずねました。「今までそんなに仲良かったわけじゃないのに」ジャージ姿のエミは膝を抱えた姿勢で細いメンソールのたばこに火をつけてフーっと煙を吐いてから「あのね、あたしもやられたことあるんだよ」と言いました。「レイプ」私は思わずエミの顔を凝視しました。むしろ異性遊びをしているような子だと私は勝手に思い込んでいたんです。私がびっくりしてエミのたばこを見ていると「吸う?」とエミがききました。私は首を横に振りました。「レイプ犯罪って有期刑でさ、どんなに悪質な連続強姦犯とかでも、長くて七年もすれば刑務所から出てこれるんだって。ふざけてるよね」エミは黒いスチールの灰皿に灰を落としました。「それに引きかえ、被害者のあたしたち女は何も悪くないのに終身刑じゃん」エミは自嘲気味に笑いました。終身刑。その言葉が私の骨身に沁みるのはもう少し後になってからのことでした。私はエミの家から精神科に通いました。朝早くに行っても診察待ちの人が多く一時間かそれ以上待ってようやく診察室に通されます。医者は私の顔をろくに見ないでモニターばかり見て二つ三つ質問し「じゃ前と同じ薬を出しておきましょう」で診察は終わり処方箋をもらうのにまた長い時間を待ちます。それから調剤薬局へ行って処方箋を提出し調剤が済むまで薬局のしみのついた白い壁をじっとみつめて名前が呼ばれるのを待って錠剤の入った小さな小袋をもらって帰ります。そういうのが私にはみじめでなりませんでした。それに処方された薬を飲むと朝が起きられなくなって、うっかりするとエミが学校へ行ったことにも気付かず昼まで寝てしまうことがありました。だから私は診察だけを受けて眠れなくても薬は飲まなくなりました。そんな十月のある日曜日エミから男の子を紹介されました。マサル君でした。三つ年上で壁紙を貼るアルバイトをしていました。私が構わないと言ったのでエミはマサル君に私の事情を話しました。マサル君は自分のことのように腹を立てて私の気持ちに共感してくれました。それがきっかけで私はマサル君と付き合うようになり、その月のうちにマサル君の部屋に転がり込みました。マサル君は背が高くてやさしくてクールでケチをつけるところが一つもありませんでした。それにマサル君の部屋はすごく片付いていて清潔でした。どうしてこんなに片付いているんだろうと不思議に思いましたがすぐにその秘密に気がつきました。マサル君の部屋には本が一冊もないんです。紙を部屋に持ち込まない主義だとマサル君は言いました。その代わりマサル君の部屋には立派なオーディオ機器がありました。私はマサル君と一緒に暮らし生活費も出してもらいました。ただ男と女ですから一緒に過ごす夜は避けられません。「きみのトラウマは理解してるけど、僕も生身の男だし」マサル君が悲しそうな顔をすると断れませんでした。私は我慢して毎晩マサル君を受け入れ終わるとトイレに駈け込んで胃の中のものを全部吐きました。私のお気に入りはマサル君がアルバイトに出かけた後の一人で過ごす朝でした。晴れた日は最高でした。急いで洗濯を済ませたあと紅茶を淹れてマサル君の高級オーディオでＦＭのクラシック番組を聴きながら一人の贅沢を満喫しました。でもそんなくつろいだ時間に慣れたある朝地獄が襲ってきました。とつぜんハイエースの中で

嗅いだあの芳香剤とつんとした体臭の混ざったニオイが鼻の中に甦って気付けば私は車の後部座席で再びあのスキンヘッドに無理やり犯されているんです。そういう心理現象があることをあとになって知りました。恐怖で氷漬けにしていた記憶が突然融けて襲ってくるんだそうです。それが来たのでした。過去にあった出来事を思い出すというレベルではなくて実際にそれが我が身に再現されているという感じで痛みも恐怖もそのままです。拳骨で殴られ私はまた鼻血を垂らし金縛りに苦しみました。そんなことが何度も起こり私はエミの言った終身刑の意味がわかりました。マサル君の部屋も安全ではなくなりました。私は恐くて心細くてマサル君の存在に縋りつき思い通りにならないと極度の恐怖心に襲われて叫び言葉で彼を傷つけました。「わたしを一人にしてよくも平気でいられるわね」「わたしがどうなってもいいの」「あんたを呪って死んでやる」マサル君とは三ヶ月くらい続きましたが、最後には彼にとって私は耐えきれない重荷になったようです。「きみに必要なのは僕じゃなくスーパーマンか何かだと思うよ」そんな言葉で私はマサル君のアパートから追い出されました。行き場を完全になくした私は冷たい雨の降る春日町の公園のトイレで夜を明かしました。十二月で家々はイルミネーションを光らせていました。私は何ヶ月も掃除をしていない汚物のこびりついた便器のわきで凍えながら人の声がするたびに震え上がりました。私にどんな悪いところがあってこんな目に遭ってるんだろう。凍える手をこすりながらくり返しそう考えました。あの失明したおばさんなんか放っておけばよかった。小学校の授業参観の日に照れくさそうに教室に入ってきたパパの表情を思い出しました。九歳の誕生日の夜にホールケーキにママがロウソクを立てて火をつけてくれました。パパがピンクのリボンのついた大きな包装をプレゼントしてくれました。開けてみると枕より大きいピカチュウのぬいぐるみで私はぴょんぴょん跳びはねました。どうして私はこんな汚い便所の中で震えているんだろう。私の何がいけなかったんだろう。何日も眠れませんでした。とうとう疲れきって私はその朝公園のベンチで横になりました。もう男に襲われようとどうでもいいと思いました。そんな私に話しかけてきたのが「おむすびの会」の森さんでした。森さんはそのとき市内の路上生活者のリストを作成していてちょうどひどい格好でベンチに寝ている私を発見したそうです。森さんは私の話をきいて施設のシェルターを一室空けてくれました。そのために前にいた入居者を病院に無理を言って予定より早く入院させてもらったそうです。森さんには本当によくしてもらいましたがパパやママに連絡するのだけはお願いして止めてもらいました。会いたくなかったし家に戻るくらいなら春日公園の汚い便所に籠もって暮らしたほうがマシでした。森さん

のおかげで数日ぶりにお風呂に入って髪を洗って清潔な肌着に袖を通すことができました。森さんの付き添いで市役所の「すまいる・ねっと・ワーク福山」へ行ってそこで若井さんという男性相談員に生活再生プランを立ててもらいました。私は働くことになりハローワークに紹介してもらいました。また住宅費用の貸付を受けて沖野上町にアパートの一室を借りました。暗くておしっこ臭くて収入のないおじさんばかりが住んでる安くてみじめなアパートでした。年の暮れには就職が決まりました。給食を作って配達する会社で正月の四日から出勤することになりました。布団も枕も人の使ったもので台所用品も人の使ったものでしたが、文句はありませんでした。私は階下に怒鳴り声のひびくアパートの一室で「おにぎりの会」に借りた小さい卓上ラジオの音量を絞って「紅白歌合戦」を聴きながら年を越しました。

給食会社の従業員はおじさんおばさんばかりでとくにおばさん達は最初のうちあからさまに私を見くびっていました。高校中退なので頭の悪い不良娘だと思ってたんだそうです。でも私は見返してやろうなんて思いませんでした。ただ友だちの誰よりも早く社会に出たことをプラスに考えようと思ってました。貸付金を早く返済して経済的に自立して給食屋の仕事で経験を積んで調理師免許をとってささやかな自分一人の生活を愛していこうと思いました。だから私をバカにするおばさん達に私は漬物の漬け方を教わったりお出汁の上手な取り方をたずねたりしました。パセリや三つ葉や水菜などのちょっとしたお野菜なら手近な容器で簡単に栽培できるというのでそのやり方も教わりました。するとおばさん達の私を見る目も変わってきて麺つゆをあらゆる料理に上手に使う工夫や一つの洗剤でトイレも風呂も部屋の中もきれいにする工夫や給料の入る通帳と使う通帳を分ける工夫や生活の中から編み出したありとあらゆる節約の知恵を積極的に教えてくれるようになりました。それだけでなく信頼して仕事を任せてくれるようになりました。四月になって本採用になり勤務もフルタイムになったのをきっかけに私は新涯町のこざっぱりとしたアパートの二階に転居しました。沖野上の時と違って住人には若い人が多くて左隣の大岩さんという三十代の独身女性は大きな口に赤く紅を塗った機関銃のように喋っては私のちょっとした一言にも大声でげらげら笑う明るい人ですぐに仲良くなれました。職場のおばさん達は最初の頃と打って変わって私にとても親切にしてくれたしアパートのご近所にも恵まれてとても順調に思えました。でも四月の終わりにまた例の現象に襲われました。それは二晩続けて起こりました。自分の部屋の中なのにいつのまにかハイエースの後部座席に変わっていて私は拳で殴られ血まみれになって、いないはずの男に犯されているんです。誰もいない部

屋の中で私は呼吸困難に陥り目を開けたまま泡を吹きました。少し幸せになるとすぐにこれが来て私をどん底に突き落とします。とくに二晩目のやつは強烈で男の低い「ごめん、ごめん」の声まで耳もとではっきり聞こえました。私ははじめて仕事をずる休みしました。その日は一日中パパの憎むような目を思い出しました。そしてきれいな部屋に転居したことを後悔しました。私には春日公園の便所や沖野上のあのおしっこ臭いアパートがふさわしかったんです。つつましい生活を愛して幸せになろうなんてバカみたいな思い上がりでした。五月の下旬頃私は有給休暇をとりました。節約して貯めたお金で倉敷のタトゥースタジオを訪ねました。刺青を彫る店ですからヤクザの出入りする薄暗い場所を想像していましたが行ってみるとお店はオシャレなカフェみたいで受付のお姉さんも笑顔のきれいな普通の人でした。予約はしていないと言うとソファーに腰掛けてデザイン集を見ながら待つように言われました。私は一階の白いソファーに腰掛けて美容院のような明るい店内を見まわしました。お客さんも学生や若い新人社員っぽい人が多いようでした。何冊もある分厚いデザイン集を見て私は刺青の認識が世間とズレていたことを悟りました。そこにある刺青のデザインは洋風なものも和風なものもみんな凝っていてオシャレでセンスのいいものでした。私は明らかに場違いな注文を持って店に来たのでした。どうしようかと迷っている間に順番が来て私は二階のスタジオに案内されました。面接した彫り師（コーディネイターというそうです）は三十代くらいでアゴヒゲを生やした筋肉質な男性で両腕にびっしりタトゥーが彫ってありました。大航海時代の航海図をデザインしたものだとわかりました。私はますます萎縮してしまいましたが、勇気を出して片腕に字を彫って欲しいと頼み前の晩にサインペンで書いたデザインの紙をカバンから取り出しました。それを見たコーディネイターはしばらく考えるように紙をみつめた後「こんなのできない」と素っ気なく突き返しました。「どうしてですか？」「あのね、タトゥーは一生ついてまわるんだよ。彫って後悔することがはじめからわかってるようなもの、彫れるわけがない」「後悔しません」「するよ、するに決まってんだろ」「どうしても彫ってほしいんです」さっきまで及び腰だったのに私はどういうわけか熱心に食い下がりました。「料金を三倍払っても構いません。ここで彫ったなんて誰にも言いません。私にとってどうしても必要なことなんです」コーディネイターは迷惑そうに私を見て、デザインの紙を見てため息をついて私の年齢や保護者についてたずねました。私は年齢と職業を言い経済的に自立していて保護者はいないと答えました。コーディネイターはまたため息をつきました。「料金は規定のタバコ箱大のものだけでいい。どうしても消したくなったらレーザー治療をする

クリニックがあるから相談するといいよ。日帰り手術できれいに消してもらえると思う。でも本当に後悔しない？」私はうなずきました。施術ベッドに私を案内して横になった私の右腕を消毒してからコーディネイターは紙に書いた私の肉筆文字を私の右腕にそっくりそのまま写し取りました。それからペンの形の機械で皮膚を削っていきました。痛かった。でも喜びも一緒に胸に溢れてきてその痛みをずっと味わっていたいと思いました。施術はすぐに終わり施術箇所は黒い消毒ガーゼで覆われました。「帰ったらガーゼを剥がしていいよ。お風呂もオッケー」コーディネイターは道具を片付けながら言いました。私は右腕がひりひりするのを感じながら階段を下り一階で料金を払って店を出ました。お昼ご飯は奮発してスパゲティハウスに入ってカルボナーラと紅茶を注文しました。今日は最良の日だ。カルボナーラを食べながら私は有頂天でした。でも最高だったのはアパートに帰ってガーゼを剥いだ時でした。私の右腕には和食器の染付けのような青藍色のインクではっきり刻んでありました。

「負け犬」

背中がぞくぞくしました。町行く人みんなにこれを見せて歩きたい気分でした。これが私の第二の名前でした。この烙印は一生ついてまわり私が何者であるかを示すのです。うっかり何かに期待しそうになった時はこの烙印が私を地べたにたたき落とし愚かな夢を見ないよう誰よりも先に私を辱めてくれるでしょう。ですが私は刺青を誰にも見せませんでしたし刺青を彫ったことも口にしませんでした。夏がきても長袖を着て刺青を隠しました。自分への容赦のない軽蔑が私を支えていました。刺青を見なくてもそこにあると思うだけで私は自分を軽蔑し嫌悪できました。リストカットをおぼえたのもこの頃で手首を切るとほっとしました。エミが吸うたばこと同じだと思います。八月に職場の厨房でまたあれに襲われました。この時はおばさん達が心配して救急車を呼んでくれました。すごく迷惑をかけてしまっておまけに入院することになって病院の人にも森さんにも迷惑をかけました。そしてパパが病院に駈けつけてきて病室で怒鳴り家に帰れと命令しました。でも今頃駈けつけてきても遅いんです。パパは私がレイプされて心の中で必死にパパを呼んでいたあの時に駈けつけてくるべきでした。あのハイエースの中の地獄から私を救わなくちゃいけなかったんです。私は何も言わずパパに刺青を見せました。パパは何歩か後ずさりしてから何も言わず背中を向けて帰りました。私は病院から会社に電話をかけて退職すると伝えました。退院して以降私はあまり外に出ませんでした。刺青を見た時のパパの顔を思い出しました。私を完全に見限ってパパは背中を向けました。その無言の背中を思い出すたびに私の口もとに笑みがこぼれました。そ

れから精神科へ通っていた時の溜まっていた薬を一気飲みして首を吊りました――

レポート用紙をデスクに放り出すと、佐々木医師はデスクに両肘をついて頭を抱えた。

「私、よくわからないんですよね」

井上は佐々木医師の背中に語りかけた。

「だって、一方的に被害を受けただけで、患者は苦境に落ちても前向きにチャンスをとらえて立ち上がってるじゃないですか。どうして負け犬なんでしょう。それに、退院してお父さんの背中を思い出して首を吊りましたって、なんでそうなるのか全然わからない」

「いいから、これ三部コピーとっといて」

かすれた声で佐々木医師は言った。

「でも先生」

「パパだパパだパパパパパ」佐々木医師が椅子をくるりと回転させて井上に向き直った。

「パパの期待だから大学進学。パパの希望で地元校。パパが行きたかったから理工系。パパに軽蔑されたから自分を軽蔑。この子はパパの評価が絶対なんだ。この子が自分を負け犬だと言ってるのは、この子自身の自己評価じゃなくて――」

「パパがそう思ってるから?」

「全部それで辻褄が合うだろう」佐々木医師は頭を掻いた。「こいつは厄介だな。その頼みのパパが短気で俗物ときてやがる。この状況下で利巧に対処できるとは思えねえ。だが」佐々木医師は親指の爪を噛んだ。「ほかに手立てがねえ」

「父親に患者との面会を許可するんですね」

井上は忙しく手順を思い巡らせた。面会前に父親と打ち合わせをする必要があるだろう。父親の口から「誇りに思っている」「信頼している」そんな言葉が出れば、あるいは綾乃の自死を食い止められるかもしれない。

「すぐ父親の家に連絡します。患者にはどうしますか?」

「前もって告げておいて。『パパ』と言わず『家の人と面会』と言うんだぞ。まあ同じ意味だけどな」

井上は医務室を飛び出し地域連携室から吉永家に電話を入れた。電話は綾乃の母親の携帯電話に転送され、来院の日程は父親からの折り返しの電話で決めることになった。父親の電話を待ちながら井上は綾乃の手記のコピーをとった。手が震えた。昼食をとることも忘れていた。

父親の来院は翌日の九月三日午前十時と決まったが、その前の二日午後四時に綾乃は自死を企図した。父親との面会を綾乃に告げたその二時間後のことだった。綾乃は点滴スタンドで病室の窓を叩き破り、そのガラス破片で自らの頸動脈を掻き斬った。窓の破砕する音に駆けつけた山本看

護師長が病室内で血まみれの状態でうつ伏せに倒れている綾乃を発見した。後に同看護師長は「患者の長い髪の毛が血だまりに泳いでいるようだった」と述懐している。ただちに止血処置を行い輸血準備に取りかかったが失血性ショックにより午後六時二十八分に死亡が確認された。

うす暗い蛍光灯の下、廊下を運ばれていく綾乃の亡骸を、井上は呆然と見送った。

肩を叩かれ、振り返ったところに山本看護師長が立っていた。看護師長が差し出した物に、井上ははっと息を飲んだ。朝見つからなかったボールペンと、レポート用紙一枚。そこには井上に宛てた走り書きの短い文章があった。

その夜、誰に話しかけられても井上は返事ができなかった。

後日、決断が裏目に出てしまったことの責任をとって佐々木医師は九州地方の病院へ異動となった。なお、吉永綾乃の入院・治療費用及び食費等の患者負担分について、綾乃の父親は支払いを拒否している。綾乃を襲ったレイプ犯はまだ捕まっていない。

井上さん。思い出したことがあります。それは、八歳の夏のことで花火大会へ行くのにパパが浴衣を買ってくれました。ヒマワリ柄の空色の浴衣で髪飾りは藤の花でした。でも浴衣の着方をパパもママも知らなくて特に黄色い帯の締め方がわからなくてああでもないこうでもないと締めては解き締めては解き私はマネキン人形みたいに二時間も三時間も突っ立ったままで着たり脱いだりしなくてはなりませんでした。しまいにパパは近所に住むおばあちゃんまで呼び出しました。おばあちゃんは着物の着付けをよく知っていて帯もきれいに締めてくれました。鏡に映った浴衣姿の私はいつもと全然違って上品できれいで私は鏡の前でぴょんぴょん跳びはねてママに叱られました。その夜パパとママと手をつないで花火を見に行きました。たくさんの笑顔の人々。イカ焼きの出店や綿菓子の出店。何もかもがきらきらしていました。パパが笑いかけてくれて私もはしゃいで下駄を履いたまま跳びはねました。

十年後にこんな日が来るなんて思いもしないで。

（「ふくやま文学」32号より転載）

瀬崎峰永
せざき　ほうえい
1968広島県生まれ
中京大学文学部国文科卒業
卒業論文は金子光晴詩集『人間の悲劇』論
97「ふくやま文学」参加
2004年「アビよかえれ」で第36回中国短編文学賞一席受賞
20年「カラスどんぶり」で第50回九州芸術祭文学賞佳作入選

ふくやま文学　広島県

自分の思いを誰かに伝えるために

福山文学では、同人誌「ふくやま文学」の発行が本二〇二一年で三三号になりました。小説、児童文学、詩、エッセイなどを掲載した同人誌です。会員は、投稿および読者会員を含めて四〇名ほどの同人の集まりです。

創刊は一九八九年で、以後毎年一号ずつ発行を積み重ねてきました。創刊までには二年くらいの準備期間がありました。かつて詩や短歌・俳句・川柳の同人誌「文芸プラザ」があり、その誌に時に投稿をしておりましたが、その誌が廃刊になり、小説や児童文学、詩を書く同志が集まり新しい同人誌を立ち上げようという話になりました。

福山市は広島県東部に位置する城下町で、今では大手の鉄鋼会社を有する人口四七万の中核都市です。書きたい、自分の思いを今留めておきたい、そして伝えたい、と切々とした気持ちを膨らませて試行錯誤しながらの「ふくやま文学」です。

創刊号は「カラス画家」といわれていた今は亡き中山一郎さんに題字とカラスの絵を頂いてそれを表紙にしました。一〇〇ページほどの同人誌でしたが、出来上がった誌を手にしたときの感激、誰かれなく見せて誇りたいような気持ちは今でも忘れることが出来ません。

それからの私たちは小説の会、児童文学の会、詩の会とそれぞれの分野で月一回の学習会を開くことにしました。小説の会ではテーマを決め原稿用紙二枚程度の短編を書き、それを持ち寄って読み、感想をのべ、批評し合いました。今は五枚から六枚程度の作品にしています。テーマは名詞であったり、動詞的なものにしたり、場面設定をして状況からイメージを膨らませて作品にしたり、何ヶ月かにわたって書いて長編にも挑戦しました。こうして書いた短編は結構な量になり、ときどきは手作りの短編集を作っています。

「ふくやま文学」合評会で。中央は「うずみ」で第８回まほろば賞を受賞した前主宰者中山茅集子。右端は新主宰者大河内喜美子

「ふくやま文学」は立ち上げからすでに三〇有余年です。この年月はやはり永い年月だったような思いがしております。この間には亡くなった同人もいます。連れ合いの転勤やまた引越しで抜けていった友もいます。若い人が入ってきたり、また思いと違って去っていったり、そのたびに少々の摩擦を繰り返しながらも、同士で支え合って続けてきました。

同人誌は出来上がると市内のいくつかの書店に並べます。ある程度の期間が過ぎると回収するのですが、沢山の返本がくるときもあり、売り切れて追加の連絡がくるときもあります。そもそもわたしたちの「ふくやま文学」は皆で印刷費を出し合って発行している同人雑誌です。書店に置かせてもらうのは資金を調達するためではなく、面識のない誰かに向けて何かを発信したいからです。売価は印刷代の半分にも満たない値ですが、本が売れると誰かに読んでもらって、その人の心に何かを残してもらえただろうかと、そう思えるだけで嬉しいのです。

最近の号では特集を組んでいます。テーマを決めてそれに付いて書きます。「面白い本」「初恋」「くりかえし読み

同人雑誌の交流も力に

たくなる本」「食べごとの話」「人生の岐路」「あの日に帰れたら」「心にのこる唄」など様々です。

他の同人誌と交流も始めました。前橋の「クレーン」、佐賀の「佐賀文学」などです。誌を発行すると必ず合評会を開きます。「クレーン」や「佐賀文学」の同人からも「ふくやま文学」に作品を投稿してもらい、彼らは合評会にも参加し、私たちも「クレーン」などに投稿します。そして、私たちもそれらの合評会に出かけます。参加することにより、激しい熱情に触れ、そのやり取りの中から何かを得て帰ってきます。

今は亡き全身小説家井上光晴氏が各地に立ち上げた「文学伝習所」から生まれた同人誌は多々あり、学んだ人たちが今も活躍していますが、中山茅集子氏もその一人です。かつての誌のあとがきに中山は書いています。

――「ふくやま文学」の火が消えたら、この町に草の根が枯れる。その一念で同人たちは身銭を切り、絶え間ない生存の不安を抱えながら時世の不条理と向き合ってきた。何年もかけて育ち根付いてきた草の命をさらに強く、独りでも多くの読者の心をつかむために、これからも書く――

同人たちは過酷な労働や会社社会の中で、自己は抹殺され、疲れきった身体や心を奮い立たせながら、それでも書いてきました。

小さなご褒美もありました。全国にはいろんな文学賞があります。同人たちはそれらに応募して破れ、懲りずにまた挑戦してきました。それらの挑戦が、中国新聞の短編文学賞、福山文学選奨などに同人の何人もが入選しています。福山文学として山陽新聞文化部門奨励賞をいただいたこともあります。「ふくやま文学」の中でお互いに切磋琢磨した成果でしょうか。

賞を頂くということは書くことの励みになります。でも、それは目的ではないのです。ただ自分の思いを今誰かに伝えるために私たちはこれからも書き続けていきます。

（代表／大河内喜美子）

自分の思いを誰かに伝えるために

前主宰／中山茅集子

福山文学の会　〒721-0971
広島県福山市蔵王町三一九七・三
代表　大河内喜美子
TEL084・943・1651

「ふくやま文学」32号あとがきより

この度「ふくやま文学」32号の編集にあたり驚いたのは創立会員がたった二人になっていることだった。読書会員を除く会員、つまり、現在の小説、詩、エッセイ、児童文学の書き手は創立以後に入会してきた人達である。さらに驚いたのは、その書き手の多くが故人になっていることだった。「ふくやま文学」を唯一の発表舞台として才能を磨きながら、不慮の死に倒れた仲間たちを心から悼むと同時に、無念さも推し量らずにいられない。

創立当時の平均年齢が四〇代だったのだから致し方ないとして、近頃三〇、四〇代の仲間も加わっていて活気の兆しが見えるのが嬉しい。

私の師であった井上光晴は「小説が書けるのは七〇歳までだね」と言っていたが、六五歳で壮絶な癌死を遂げられた。さぞや無念であったろう。師の志を継ぐためにも、私は七〇歳は疾うに越えた九三歳の今も書き続けている。創作の原点である創造力は衰退し、体もボロボロだが命のある限り書き続けよう。若い仲間たちよ。この町にただ一本の文学草の根を枯らさないでほしい。と願うばかりである。

中山芽集子

飢餓祭 46号

しずり雪

小網春美

金沢の東山界隈は一面の雪だった。江戸時代に茶屋として栄えた古民家も、道ばたの柳の木も、昭和の置き土産のようなレンガ造りの洋食屋も、すべてが雪の中にあった。

昨夜私が金沢に着いたとき、夜の明かりの中に風花が舞っていた。スカートの裾を翻す風の冷たさに、思わず身が縮んだ。

一夜明けると、ホテルの窓の外に拡がる町は、神々しいばかりの白い世界に変わっていた。お墓参りは午後からと決めていたけれども、少しでも早く雪の中を歩いてみたくて、朝食をすませるとすぐに、バスに乗った。茶屋街近くのバス停で下り、真っ直ぐ法勝寺に向かう。

法勝寺は東山寺院群に数ある古刹のうちの一寺である。茶屋街からの道筋は、この町特有で複雑に入り組んでいる。迷路のように曲がりくねった細い道を、ぬかるみに足を取られながらも、確かな足取りで歩いていく。法勝寺に行くのは一年に一度、今年で五度目になる。

名も知らぬお寺の土塀に沿って、緩やかな坂道を登っていくと、目の前で不意に、木の枝から一塊りの雪がふわりと落ちた。落ちた瞬間に、塀の中の木の一枝が跳ね上がる。

「あっ」、声を上げそうになった。

それと同時に、「しずり雪」という言葉が甦った。四年もの間、思い出そうとして、どうしても思い出せなかった言葉だ。

「しずり雪というのは、枝から落ちる雪のことなんだ」

そう教えてくれた人の顔が浮かぶ。

雪の重みに耐えてきた枝がとうとう耐えきれなくなり、一瞬の緊張を経て跳ね上がる。そして雪は静かに落ちていくのか。

それが彼の姿と重なる。すると、胸の奥のしこりのようなものが痛んだ。日頃は彼への思いはじっと息を潜めている。だが、埋み火のようにいつまでも消えず、いったん息を吹き返すと再び炎を上げる。が、やがてそれは下火となり、あとにはやるせない喪失感だけが残った。

しずり雪をそっと両手に掬い、ハンカチに包んだ。お墓に手向けようと、再び坂道を登り始めた。

私が中学時代に一時期住んでいた松戸のアパートの近くに、不思議な一家が暮らしていた。七十代と思われる男女と、六十代と思われる女性、それに小学低学年の女の子の四人家族である。この七十代の男女が夫婦のように見えたが、もしかしたらこの組み合わせは間違っていたかも知れない。いずれにしても、余った女性一人は何者かというと、まったく見当がつかない。あるいは誰かと誰かが兄妹なのかも知れないと思ったりもしたが、三人の顔は似ても似つかない。そもそも夫婦などどこにもいないのかも知れない。そして、この女の子はこの中の誰かの孫かもしれないし、まったく赤の他人かもしれない。私は時々、つまらなそうな顔で独り歩く、下校途中の女の子に出会ったが、それ以外にはいつでも四人一緒だった。出会うのはたいがい通り道だが、コンビニでも本屋でも出会った。いつも四人が一緒なので、いっそうこの家族関係を不思議に思ったものだった。

私たち——立花と私、そして昂(こう)の三人が東京から越してきて、初めて揃って出かけたときに、思いがけずあの四人家族のことを思い出したのは、たぶん三人の関係に引け目を持っていたからだろう。

私たちが住んだのは、金沢の中でも特に古い因習がはびこっているような町だった。それでも町内の人たちにとって、初めは何気ない三人だったに違いない。立花が六十四歳、私が三十八歳、昂が四歳である。立花は七十代に見えるくらい老け込んでいるが、それでも一般的には親子三代といったところだろう。まあ、立花と私が親子でなければ、夫婦だろうかと訝しんだところで、世間ではこんな夫婦がいないわけではないから、多少の興味を引かれた程度だったろう。

とにかくも、この町に住むに当たって、立花と私がまったく赤の他人であることを、ことさら公表したくはなかった。それは三人の関係が不純だからでなく、その不純でないことの説明が面倒くさかったからだ。だが、町会長に戸

籍届のようなものを提出しなければならなかったので、その用紙に「立花修司」、「七尾朱里」、「七尾昂」と書き込んだあとに、はたと困った。用紙には所帯主を書く欄と、それぞれ所帯主との「続柄」を書く欄がある。所帯主は立花でいいとして、あとはどう書けばいいのだろう。昂は私の二人いる息子のうちの一人で、私と立花との関係はと言えば、立花は膵臓癌で余命幾ばくもない病人であり、私はその介護人である。さんざん迷った挙げ句に、「他人」と書いた。たとえ「介護人」と真実を書いたとしても、せいぜいが不倫関係だと疑われるのが落ちだろう。その町会長のせいかどうかはわからないけれども、私がこの町に馴染むに従って、しだいに三人の関係への興味が、疑問に変わっていったのを肌で感じた。

もっとも、隣家の中條夫婦には初めから事情を話しておいた。私たちが住み始めた家は、立花の母親が晩年を暮らした家だった。母親は同居していた長男の嫁と仲が悪かったので、長男が亡くなったのを機に別居した。折しも立花の会社が景気の良かったこともあり、彼が母親のために建売住宅を購入したのだった。それ以降、立花は帰省するたびに母親の家に身を寄せて、年の頃も似ていたせいもあり、中條夫婦と懇意にしていたということだった。

二軒の家の裏にそこそこの庭があり、低いフェンスで仕切られているだけなので、中條さんのご主人とはそこでよく顔を合わせた。私は生まれも育ちも千葉で、それまではアパートとマンションの生活しか知らなかったので、庭のある暮らしが嬉しくてしかたがなかった。庭には立花の母親が手がけていた名残だろう、紫蘇が繁っていたり、マリーゴールドが咲いていたりする。真夏の早朝、庭に出るといっせいに蚊の攻撃を受けたが、殺虫剤をまき散らしながら、庭の手入れをした。するとあとから隣のご主人が出てきて、決まって、

「修司さん、どうですか?」と、立花の身体を心配してくれた。

時には庭になったキュウリやトマトをもいで、「どうぞ」とお裾分けもしてくれる。立花の在宅医療専門の医者の紹介も、昂の保育園の紹介をしてくれたのも、庭で立ち話をしながらであった。どんな情報でもインターネットに頼る時代だが、中條さんから得る情報は心がこもっていた。中條さんは「定年になって、することがなあて」と、そんなに広くもない畑に精を出しているようだった。

立花を犀川の散歩に誘い出してくれたのも、ある朝の中條の何気ない一言からだった。

「朱里さん、昨日、犀川で珍しくササゴイを見たよ」

「ササゴイって、鯉ですか?」

私が尋ねると、立花が横から口を出した。

「七尾、鳥だよ、鳥、サギの一種だ」と軽く笑い声を立てる。

縁側に隣接した座敷で寝ている立花に、中條さんの声は直接届かないが、時々こうして私を介して話に参加することがある。

「立花さんは本当に何でも知っているんですね」

思わず漏らした私の言葉を遮って、中條さんは

「修司さん、どうです、家に閉じこもってばかりいないで、たまには犀川に散歩でも行ったら」

立花のほうに向かって大声を上げた。

「犀川かあ、行ってみようかな」

中條さんにでも私にでもなく、ふと、漏らした。

立花は末期癌といっても、まだまだ自力で歩ける。ところが金沢の大学病院へ行ってからというもの、まったく出歩かなくなった。彼は在宅医療を選んだが、二週間に一度は抗癌剤の注射を打たなければならないし、当然ながら設備の整った大病院と手を切れるわけがない。東京の病院からの紹介状やカルテなどを渡したものの、新しい病院ではあちらこちらと回されて、くたびれ果てたようだ。

彼は病人にしてはかなり太っている。病気をしても痩せないのではなく、ずいぶん痩せたけれども、まだまだ太っているのだ。元気なころの彼を一度でも見たことのある人ならば、その異様な風貌に圧倒されただろう。身長は一六七センチある私よりも少し低いくらいで、その身体のどこでもいい、一カ所を一突きしようものなら、パンクしそうだった。下膨れの顔が異様に長く見えたが、それは額が禿げあがっているのと、顎と首の境目がわからないくらいに太っていたせいだったろう。

彼はもともと歩くのを億劫がっていたが、病気になっていっそう歩かなくなった。だが、病院で車椅子を勧めると、

「まだまだ歩けるものを」と拒んだ。そのくせ病院ですっかり歩く自信をなくしたのだろう、いっそう歩くのに嫌気がさしたようで、どれだけ散歩を勧めても応じなくなった。

そんな立花が散歩に行く気になったのだから、気が変わらないうちにと、

「中條さん、立花さんが散歩に行くそうですよ」と、中條さんに向けた言葉だが、立花にもしっかり届いているはずだ。

犀川は立花にとって思い入れがある。幼いころに川端に住んでいたらしいが、最近では寝室を通り抜ける涼しい川風を楽しんでいる。西日が差す昼頃までエアコンを入れるのを嫌い、「ああ、犀川の風だ」と言って、目を細める。

そうこうするうちに昂が起きてきた。散歩への気は逸(はや)るが、昂を保育園に送り出すまでは身動きできないし、さすがに真夏の日中の散歩は病人にきつい。ようやく出かけたのは昂が帰ってからで、夕方の三人揃っての散歩になった。

金沢に越して間もなく、昂を犀川に連れ出したことがあった。家から子供の足でも十分とかからない。川岸に近

づくと、昂がとつぜん、「あっ、電車だ」と叫んだ。だが、近くに電車が通るはずもない。訝しみながら耳を澄ますと、すぐに思い当たった。都会育ちの昂に、川の流れる音が電車の音に聞こえたようだ。期待した電車は走っていなかったが、広々した河川敷を昂はいたって気に入ったようだった。「サイガワ、サイガワ」と、よく回らない口で歌うように繰り返した。

外出着に着替える立花の動作はおぼつかない。散歩を心待ちにしている昂だが、立花を辛抱強く待っている。ようやく家をあとにすると、立花と手をつないでゆっくり歩く。昂は子供ながらに病人はいたわるものだと心得ているようだ。河川敷を目の前にすると、立花にとって初めての場所だと思ったのだろう、

「ほらね、おじいちゃん、とっても広いでしょう」と自慢するように立花を見上げた。

立花は昂と手をつないだまま、川に向かって「ほうっ」と、息を吐いた。

三人で金沢での生活が始まってすぐに、昂はこともなげに立花のことを「おじいちゃん」と呼んだ。ずいぶん失礼だとたしなめようとする私の機先を制して、立花は「おじいちゃんとは嬉しいなあ、僕、死ぬまでおじいちゃんになれないと思っていたからね」と言って、顔をほころばせた。それからも、昂にはまるで本当の孫のように接している。昂は昂で、本当も嘘もなく、立花を「おじいちゃん」だと思っているようだ。

空は暮れなずんでいる。その空をバックに、川向かいに見える寺町台の家々や木々は、すでに陰を帯びている。大小の甍と、高低差のある木々、それらが空と接した所にできたシルエットが、興趣をそそる。

私が二十歳でトラベルビジネスの専門学校を卒業して入社したのは、神田にあるラークトラベルだった。立花はラークトラベルの社長だった。私はのちにそこに生き甲斐を見出すようになったが、最初はほんの腰掛け仕事のつもりであった。私の夢はツアーコンダクターとして日本ばかりか、世界中を旅して回ることだった。だが、ラークトラベルは飛行機の安売りチケットを売る、しがない旅行会社にすぎなかった。それに何と言っても、社長の立花が最悪だった。あのころの立花は四十代半ばで、恐ろしく太っていたわけでも、額が禿げ上がっていたわけでもなかったが、太い眉とぎょろりとした目が生理的に嫌だった。

それよりも私がもっと彼を毛嫌いしたのは、不潔だということだ。これはあとから知ったことだが、彼は独身で、離婚歴もなかった。それを聞いたときに、彼が不潔だということをいたく納得したものだった。背広の肩の辺りに絶えずフケが落ちていたし、爪は滅多に切らない。ハンカチは臭うくらいに薄汚れている。おまけにお手洗いに行っても手を洗わない。立花が手を洗うか洗わないか、いちいち監視していたわけではなかったが、そんなことは女ならば、何となく勘でわかるのだ。

そんな手で立花は頻繁に握手を求めた。中途半端に生ぬるく、男にしては柔らかすぎる手だ。彼を嫌いな極めつけは、「ハグ」「キス」「ハイタッチ」である。最近でこそ、「セクハラ」「パワハラ」と言って撃退できるようになったが、当時は我慢するか辞めるかの、二者択一しかなかった。

それでも私が会社に踏み止まったのは、会社の活気というのだろうか、そういうものに引っ張られたのだと思う。それに会社に慣れるに従って、少しずつではあったけれども、立花の人柄に惹かれてもいった。

立花は仕事に対してひたむきであった。また、経営手腕があった。その証拠に、私が入社したときには社員が十名前後に過ぎなかったが、十年もすると業績も上がり、三十人以上の社員に膨れ上がった。ラークトラベルは当時にしては珍しく能力給を採用していたので、有能な社員が育ったし、社員のやる気が業績に直結したのだろう。東京の有名私立大学の就職課では、ラークトラベルに「優良企業」というレッテルを貼って、毎年学生に就職を勧めていたくらいだ。

会社では私を除くすべての社員が大卒なので、専門学校しか出ていない私は異色と言えた。私は最初、ラークトラベルにアルバイトで入社したのだった。立花はアルバイトの面接で訪れた数名の中から私を選び、一年間のアルバイトを通して私を見込み、正社員に迎えてくれたのである。

私は正社員になると、二、三年のうちに頭角を現し、やがて営業成績で絶えず上位を争うようになった。おそらく私の負けん気が最大限に発揮できたということだろう。また、社長の言葉を鵜呑みにするならば、「七尾は努力家だし、何より機転が利く」ということらしい。

私はそう言われても、自分では何が「機転」なんだか、よくわからなかった。いつだったか、立花が「七尾には一言があるんだな。お客さんには必ず『お気をつけて』、『楽しい旅をしてくださいね』と、言葉を添えるんだ。もちろん、こんなことは当たり前のことだよ。だけど、最近の若いもんは、この当たり前の一言が言えないんだ」と言っていたことがあったし、「七尾はお客さんと雑談を交わしながら、さりげなく次の旅行に話の水を向けるのが実にうまい」とほめてくれたこともあったので、つまりは、「機転が利く」とは、そんなことなんだろう。もっとも、ブスでも美人でもない私の丸顔が暖かみがあり、取っつきやすいと受けが良かったので、案外、私の顔が営業に一役買っているのでないかと、自分では思っている。

とにかく成績さえ良ければ、会社はたかが二十代の小娘

に、ポンと百万円近くもの月給を払い続けてくれたのだった。

私は会社に籍を置いたまま、二度の結婚と二度の離婚をした。離婚の理由は一度目は夫のマザコンで、二度目は夫の浮気だった。結婚はもうこりごりだと思っているが、それぞれの夫の間に一人ずつ息子をもうけたのが、結婚生活での収穫であり、私の幸せだと思っている。二人の息子を夫に奪われずに自分の手元に残し、親子三人何不自由なく暮らせるのも、ひとえにこのラークトラベルのお陰である。もっとも、二人の息子の面倒を見ていたのは、実家の両親だったけれども。

自分の生きていく目標をラークトラベルに見つけた私は、気がつくと立花への嫌悪はどこへやら、いつの間にか彼を尊敬していた。

立花は仕事の細かい指図はほとんどしなかった。すべてにおいて自由にやらせてくれるのが、彼のやり方だった。その代わりに、厳しさも徹底しており、責任はあくまでも一人で負わなければならない。だから、出来の悪い社員は薄給に甘んじなければならないし、それに不満ならば辞めるしかなかった。また、自分のミスで生じた損失は、自腹を切らなければならなかった。それでも立花は社員から慕われていた。それはきっと、彼には厳しさの中にも、優しさがあったせいだと思う。

私が立花の優しさに初めて心を動かされたのは、客が予約をキャンセルしたときだった。「まだ発券をしていませんから、キャンセル料はいりませんよ」。立花が客に言った言葉に耳を疑った。規約ではすでにキャンセル料が生じている。私も旅行会社に勤めたくらいだから、学生時代にはよく旅行をしたものである。思いがけなくチケットのキャンセルをしたときもある。そのときはもちろん、規約に従ってキャンセル料を払っている。

私は客が頭を何度も下げて会社をあとにしたのを見届けてから、立花に疑問を投げかけた。

「だってね、せっかく楽しみにしていた旅行だ、それが行けなくなった上に、お金を取られたんじゃ、あんまりかわいそうじゃないか。もちろん、ほかの会社はキャンセル料を取っているよ。だけど、発券さえしていなければ、旅行会社は航空会社にお金を払う必要がないんだ。だから、これでいいんだ」と、立花はこともなげに言った。

立花の優しさは社員への細やかな対応にも現れていた。社員の一人が大きなミスを犯したときだった。ミスがミスだけに、立花はこっぴどく叱ったけれども、社員の後始末が終わると、彼はさりげなく優しい言葉をかけているのを目にしたことがある。そればかりか、数日後にはもう、挽回の機会を与えたというのは、ずいぶんあとになってから知った。

立花は社員に率先して営業の仕事をこなしていたので、私は彼が社長の椅子に暢気に座っているところなど見たことがなかった。だからこそ、営業成績は絶えずトップの座にいたし、社員の誰もが彼に一目を置かざるを得なかった。

こうして私は仕事に関するやり方はすべて立花から教わった。だから、自分の目標を立花に置いた。そして気がつくと、立花と追いつ追われつの成績を残すようになっていた。

成績の上で私が立花と対等に渡り合うようになると、二人のプライベートの付き合いが始まった。初めは私が立花の成績を上回った月末などに、褒美として夕食をご馳走になった。その食事が成績抜きになり、それが頻繁になった。

またあるとき、こっそり社長室に呼ばれ、何事かとおずおず部屋に入ると、目の前にポンと、高価な英会話の教材が置かれた。

「上げるわ」ぶっきらぼうに言った。

私は外国語を話せない。ラークトラベルの社員は、私を除いて全員が英語ばかりかドイツ語フランス語と、外国語が堪能である。だから立花はなんとか私にせめて英会話の勉強をさせようとしたのだった。それなのに私は彼の期待に応えることができなかった。一年ほどで勉強を放棄して、未だに英語は話せない。

お互いに独身の身軽さもあり、二人の関係は日ごとに緊密になっていった。二人の時間が増えると、私は社長としてばかりでなく、個人的にも彼に心酔していった。そのころは、すでに立花の肥満が始まっていたので、若い私がそんな中年男と食事をしたり、飲みに行ったりするのにためらいがないではなかった。だが、二人は恋人でもなければ、不倫関係でもないのだから、何を気にすることがあるだろう。そもそも立花には愛人がいるのだ。脇が甘い彼は、社員に何度もデートするところを目撃されている。それも不特定多数の女性らしい。とまれ、彼の不恰好さにほんの少し目をつむればすむことだ。彼に直接触れる時間が、至福の時間に思われた。

立花は有能な社長でありながら、会社では実にのんびりしゃべった。その代わりに、時々ぎょろりとした目が、すごみを見せた。それが二人だけになると、打って変わって、だらしがない垂れ目になった。そして能弁になった。私が垂れ目の立花から何度も聞かされた言葉は、「勉強しろ」であった。「人間、死ぬまで勉強だ」と、力を込めた。高校時代の成績が優秀でなかった私にとって、耳の痛い言葉だ。すると、

「なに、勉強ができなかったからといって、七尾は頭が悪いわけじゃない。ただ、勉強をしなかっただけだ。勉強なら今からすればいいんだ。それにね、いい大学に行ったからといって、必ずしも頭がいいとは限らないんだ。ただ、

試験の成績が良かっただけだよ」と、私を戸惑わせた挙げ句に、
「七尾は頭がいい」と、私の目を見て言った。
私が返答に困っていると、
「要するに、試験勉強ってやつは、生きた勉強でないってことだよ。確かに七尾はうちの社員と比べて知識が乏しいかもしれない。だけど、知恵があるし、機転が利くんだ。それ以上、何が必要だと言うんだ。それはそうとね、七尾、人間、何のために勉強をするんだと思う?」
そう尋ねられて面食らった。こんな質問に即答できる人っているだろうか。私が答を探しあぐねていると、立花は自信たっぷりの笑みを浮かべた。
「幸せになるためなんだ」いとも簡単に言った。
また、よく環境問題について語り、そして自分でも勉強をしろと促した。
「七尾、無知とは時に罪なんだよ」と、ぎょろ目を剥いた。
私は成長期の子供のように、真剣に彼の言葉に向き合った。そして、彼を心底慕った。立花を好きなのかと聞かれれば、間違いなく好きだと答えるだろう。だが、彼を思うとき、胸がときめきはしない。二人の間の二十六歳という壁は、私に決して恋心を抱かせはしなかった。それでも、彼に尊敬ばかりか信頼と親しみを持っているのだから、彼への思いは一種の愛情だと言っても、間違いでないだろう。

私たちの仲は私の二度の結婚と産休でいったんは遠ざかったが、二度の離婚ですぐによりを戻した。
「だいたい七尾は」
よく行くレストランで、運ばれてきたステーキを前に、立花が言った。
「まったく男を見る目がないんだなあ。僕は君を頭がいいと言ったけど、あれは撤回するよ。ねえ、七尾、どうして君みたいな女性があんなくだらない男を選ぶんだか、僕にはさっぱりわからないよ」
立花はステーキの脂身を口に運ぼうとしている。私は私の結婚について突かれると、まったく返す言葉がなかった。それをごまかそうと、話をそらした。
「立花さん、その脂身はよしたほうがいいですよ。それ以上太ったら、命取りになります」
立花はフォークを持つ手を止めると、ぎょろりとした目で私を見据えて言った。
「僕が病気になって先がないとわかったら、七尾と結婚する」
「結婚する」という言葉が、あまりに軽かった。軽すぎる言葉が、みるみるうちに重さを持ち始める。すると、息が詰まった。それは私にとって、かなりショックだった。二十六歳の年齢差と言っても、立花が男で、自分が女である以上、あり得ることなのだと、今更ながらに思い知らされた。だからと言って、どうして彼の言葉を受け入れることができただろう。もっとも、立花に「好きだ」「愛してる」「結婚してくれないか」と言われたならば、言下に断っていたに違いない。それが「七尾と結婚する」と言われては、好きも嫌いもなく、心が引いてしまう。何と一方的で乱暴な言葉だろう。
私はしばらく呆然としていた。そしてようやく私の出した言葉は、逃げ口上だった。
「私、立花さんと結婚なんかしなくったって、立花さんが病気になったら、必ず面倒を見てあげます。立花さんの死に水は私が取ってあげますから」
逃げ口上ではあったが、言いながら、この、家族のいない立花の面倒は私が見て上げなければ、誰もいないのだとつくづく思った。
「だから、結婚でなくって、養子だったらなってもいいけど」
そんな言葉が淀みなく出てくる。だが、立花は私の言葉をあっさり拒んだ。
「養子ではだめなんだ」
その強い口調にたじろいだ。すると、今度はその口調を和らげるように、静かに言った。
「七尾に僕の死に水を取ってもらえるとは、嬉しいねえ。そうしたら、僕が今住んでいるマンションね、七尾にあげるよ」
「本当? やったあ」思わず手をたたいた。
マンションをもらえると思うと、正直、嬉しい。だが、彼の言葉に軽い乗りで応えたのは、真剣にマンションをほしいと思ったからではなかった。マンションをいらないと言ってしまえば、二人の親密な関係が壊れてしまうかもしれないと思ったからだ。ましてや、それがあくまで結婚が前提なのかどうかの、真意もわからない。立花の顔を窺うと、彼は浮かない顔で、脂身を口に入れるところだった。
レストランでそんなやりとりがあって間もなくだっただろうか。ラークトラベルの経営が悪化し始めた。それまでもインターネットの普及で、顧客が流れていたのはわかっていた。そこに追い討ちをかけたのは、航空会社から安売りチケットが回ってこなくなったことだ。航空会社は大手の旅行会社を厚遇するために、ラークトラベルのような小会社を冷遇するようになったのだ。やがて給料の遅配が始まり、いつ倒産するかと肝を冷やす毎日が続いた。立花の顔から、笑顔が消えた。
二年間超低空飛行を続けていたラークトラベルだったが、それでも墜落はしなかった。立花の死にものぐるいの奔走で、会社を丸ごと買い取ってくれるM&Aが成立したのだった。その会社は本社がしっかりしているので、社員たちの将来は保証されたも同然だ。それを知らされると、

「オーッ」と会社の中に歓声が上がった。騒然としていた会社に冷静さが戻ったとき、私を始め社員たちは、それはとりもなおさず、社長の退陣だということにようやく気づいた。

私がラークトラベルを去ろうと決心したのは、その翌日だった。私は会社の景気の良かったころ、大手の保険会社から一千万円の社員研修旅行の契約を取り付けたことがあった。その保険会社から熱心なヘッドハンティングを受けていたのだ。立花のいない会社にもはや未練はなかった。立花がこの会社を去るより先に、一日でも早く退職しようと、心を固めた。

金沢に来てからの立花の体調は良い日もあれば悪い日もあったが、身体は確実に衰えていった。日課となっていた犀川への散歩は、最初はおぼつかないながらも、自力で歩けた。それが杖を突いて歩くようになり、杖だけでは歩けなくなり、私の肩を頼るようになった。やがて猛暑も遠ざかり、少しずつ散歩に優しい季候になったというのに、三日前からとうとう散歩はできなくなった。最初のころは末期癌の患者にしては散歩もできるのかと、嬉しい驚きがあったが、歩けなくなってみると、ついこの間までは歩けたのにと、体力の低下のあまりの早さにがっかりした。

立花はもはや太っていたころの面影はない。二週間ほど前から腹痛に悩まされるようにもなった。だが、決して「お腹が痛い」と言って、騒ぎだてはしなかった。私の病人はいつでも静かに腹痛を訴えた。そればかりか、おそらくほとんどの病人がそうであるような、無理無体な我が儘は決して言わず、私への感謝の言葉を決して忘れなかった。そのせいだろうか、病魔は完全に彼を侵食し始めているというのに、彼の闘病生活は実に淡々としたものにみえた。

その闘病生活を支える私の一日は、朝六時に始まる。二階から下りてくると、まず最初に立花の部屋をのぞく。たいてい彼は起きていて、どうかすると腕を上げたり足を上げたり、ずいぶん頼りないが、彼なりの運動らしい。運動が終わるのを見届けてから、新聞を届ける。彼は新聞を心待ちしていて、すぐに読み始める。後ろから目を通し、テレビの番組欄からページを繰る私とは反対で、ちゃんと一面から読んでいく。新聞はずいぶん時間をかけて読んでいる。私は朝食を作り始める。料理の苦手な私の一番いやな時間だ。立花が口にする唯一の私への愚痴と言えば、私の料理くらいだ。

「七尾は本当に料理が苦手だなあ」、時々漏らす。

それでもお腹が痛いとき、体調がひどく悪いとき以外は、不思議においしそうに食べてくれる。もっとも、どうかするととんでもなく仕上がった料理を前に、「ごめんね」と言って、箸を置くときもある。すると、昂が、

「おじいちゃん、おかずを残したらだめなんだよ。好き嫌いはだめだって、雅子先生が言ってたよ」と、保育園の先生の名前を出して、咎めた。

これでも私は立花のために新鮮な魚を求めて近江町市場へ足繁く通っているし、中條さんの奥さんから魚料理を習ったが、どうしても料理上手にはなれなかった。

朝食の支度が整ったころ、彼の部屋から日替わりで、ドイツ語か英語の声が流れてくる。ドイツ語と英語教材のDVDで、毎日の勉強を怠らない。勉強と言えば、読書にも余念がなく、経営学の本や哲学の本を読んだりしている。小説は読まない。

「七尾、人は死ぬまで知らないことを知ったという喜びがあるんだ。そして、人間としての成長を自覚したときには、最高に嬉しいものなんだ」

そう語るときの立花の声は力なく、身体は小さく縮んでいても、私の目には会社時代同様に、毅然として、堂々としていた。

朝食は三人揃って食べる。立花はまだ茶の間の食卓に向かうことができる。朝食と限らず、食卓を囲んで笑い声が起こったり、話が弾んだりするときはいつでも、昂が中心にいる。そのたびに私は、まるで本当の家族のようだと思う。

昂を保育園に送り出したあとは、洗濯と掃除を始める。料理は苦手だが、掃除は好きだ。時間をかけて掃除をすますと、私は介護人になりきる。立花の身体をさすったり身体を拭いたり、たわいのない話に付き合ったりする。寝室にジャズが流れている。彼の本格的な介助はまだ必要でない。まだトイレにも一人で行けるし、お風呂でさえ一人で入れる。「背中流しますか」と尋ねても、彼は頑固に拒む。まったく思いがけないことに、彼は羞恥心が強かった。

夕方になって昂を迎えに行ったあとは、再び私の嫌いな料理の時間が始まる。このころ、彼はラジオで株式市況を聞いている。こうして、淡々とした一日が終わる。

それでもたまにはハプニングがある。いつものように朝一番に朝刊を届けたあと、立花の興奮した声で呼び戻される。

「七尾、ちょっと来て、ちょっと」

何事かと寝室に行くと、彼は広げたままの新聞を示した。

「これ見て、瀬戸が個展をやってるんだ」

示された所を見ると、カラーの写真付きで漆の個展の記事が載っている。「瀬戸」と言えば、金沢に来た当初、たびたび聞かされた名前だった。彼が立花の高校時代の親友で、漆芸家だということも聞いている。「せっかく金沢にいるんだ、瀬戸に会いたいなあ。だけど、瀬戸は能登の突端に住んでいて、そりゃあ遠いんだよ。車でも三時間はかかるだろう。それなのに電車はもう廃線になったし、だい

たい、瀬戸は変わった奴で、携帯電話も持っていなければ、車も運転しないんだ」と言って、連絡するのをためらっていた。その瀬戸さんが金沢の画廊で個展を開いているのである。

「七尾、僕の代わりに個展を見に行ってくれないか。そうだ、ワインでも持っていってくれ」

彼の口振りにせかされて、個展が開かれる時間を見計らって早めに家を出た。

画廊は繁華街から少しばかり外れた所にあった。表からはこぢんまりとした画廊に見えたが、ドアを開けて中をうかがうと、案外広い。全体に薄暗い中で、漆の作品だけにスポットライトが照らされて、神々しく浮かび上がって見えた。作品はけっこう多い。画廊には六十年配の男女がいる。男が瀬戸さんだろうか。私が入っていくと、

「いらっしゃいませ」二人同時に声を上げた。

思った通り、この少しも芸術家に見えない大柄でスポーツマンタイプの男が瀬戸さんで、女性のほうは奥さんのようだ。

「私、立花さんの代理で来ました」おずおずと声をかける。

すると、瀬戸さんらしき人は一瞬怪訝な顔を見せたが、

「立花って、東京の？」と大きく目を見開く。

「立花さんはこの七月から金沢に住んでるんです」そこまで言うと一呼吸置いて、

「実は、立花さんが膵臓癌を患っていまして、もう長くないんです」思い切って言った。

すると、向こうでも一呼吸置いて、

「もう長うないって……まさか……」うなるような声が漏れた。

「膵臓癌？」奥さんが確かめるように言った。

「膵臓癌です。気がついたときにはもう遅かったそうです。……私、以前、立花さんの会社に勤めていました七尾と申します。今は立花さんのお世話をさせていただいています」

あらためてお互いに自己紹介をすますと、黙ったままで椅子を勧められ、黙ったままで座る。すると瀬戸さんが私をあからさまにまじまじと見つめた。

「あんたのことは何回か聞いたことがある。大学を出ていないのに、特別優秀な子がいるって。最初はただの社員自慢やと思うとったけど、そのうちに、どうやら立花はその子に惚れとるなって気がついた。まあ、立花はあんたにほんまに惚れとったね。だけど、歳も離れとるし、あきらめたとばっかり思うとった。そうか、あんたら結婚したんや。それにしても、よう結婚してくれたね、ありがとう、ありがとう」

「いえ、私は今、立花さんの家政婦みたいなものなんです」

自分の立場をはっきりさせたつもりだったが、瀬戸さんは感謝の言葉を口にするばかりで、私の言葉が耳に入らないらしい。

芸術に疎いこともあり、瀬戸さんの作品を見るのにも気が入らず、お祝いだと言ってワインを渡して帰ってきた。

その日、昂が眠りについてから、チャイムが鳴った。不思議に思いながら表に出ると、立っていたのは瀬戸さんだった。芳名帳の住所を頼りに来たのだろうが、スマートフォンを持っていない瀬戸さんは、この家にたどり着くのは大変だったろう。思った通り、人に尋ね尋ねして、そう遠くもない距離を、迷いながら一時間ほどかけてやって来たらしい。

「個展の会場を閉めてから来たんで、こんな遅くに、すみません」と頭を下げた。

瀬戸さんを寝室に案内すると、すでに声を聞きつけていた立花は、感激のあまり起き上がろうとする。今し方、お腹が痛いと言って痛め止めの座薬を挿入したが、薬はまだ効く時間ではない。彼はベッドを操作して上半身を起こした。

久しぶりに対面した瀬戸さんは、すっかり痩せ衰えた親友の姿に、胸を突かれたようだ。

「立花……」そう言ったきり絶句した。

立花が苦しそうに身体を左右によじると、「苦しいんか？」と自分でも苦しそうに顔をしかめて、立花の顔をのぞき込む。

「いやあ、さっき痛み止めを入れたから、すぐに良うなるやろう」

瀬戸さんはしばらく呆然とベッド脇に突っ立っていたが、やがて立花の痛みが和らいだのを知ると、勧められた椅子に腰を下ろした。

「もういいんか、無理、するなよ」

「なあに、痛み止めが効けば、嘘みたいに良うなるんや。瀬戸、僕ね、麻薬中毒患者の気持ちが良うわかるわ」と苦笑いする。

「ほうか、少しは楽になったか。それにしても、膵臓癌やなんて、どうしてもっと早う言うてくれんかったんや。ほんま、びっくりしたわ。それに立花が結婚したんにもびっくりやわ。看病してくれる奥さんがいてくれて、本当に良かったなあ。立花が奥さんにご飯作ってもろうて、一緒にご飯食べて、一緒に笑うて、人並みの幸せを知ってもろうて、何が嬉しいって、それが一番嬉しいわ」

「そうだね、この歳になってね、初めて人並みの幸せがわかったね。それからね、瀬戸、僕ね、死に水を取ってもらえる相手がいるというのが嬉しいんだ」顔色一つ変えずに言った。

「死に水やなんて」

瀬戸さんは言葉に詰まったようだ。否定しようにも否定

できない事実に、あぐねている。そこから逃げるように、ふと、私のほうを振り向いた。

「さっきはわざわざ個展に来てくれてありがとう。これね、結婚祝や。二人で使うてください」と、紙袋を差し出す。

「立花さん、お祝、いただいていいですか?」

私は「結婚もしていないのに、いいのですか?」と尋ねたつもりだった。だが、すぐに反応したのは瀬戸さんのほうだ。

「立花さん言うて、まだまだ新婚やなあ」と屈託なく笑う。

立花が受け取りを拒否するふうもないので、

「開けてもいいですか」と立花にとも、瀬戸さんにともなく声をかける。

「出してみて」

立花が何食わぬ顔で言うので、袋の中を探ると、黒と弁柄色の漆塗りの夫婦椀が出てきた。それを立花に手渡すと、

「これはいいね、夫婦椀なんて、本当に嬉しいね。遠慮なくもらうよ。早速明日から使うよ」屈託なく言う。

立花は二つのお椀をまるで女の肌を愛しむように撫でている。私は立花と瀬戸さんの心根を思うと、まったく違う二つの責任の重さに、胸がつぶれそうだった。

私がラークトラベルを辞めてからも立花から不定期に電話があり、そのたびにご馳走になっていた。

その電話をもらったのは雨の日だった。雨は二日前から降り続いている。もう梅雨に入ったのかもしれない。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど、僕のマンションまで来てくれないかなあ」

声にいつもと違う異様な響きがあった。

立花のマンションならば、二、三度行ったことがある。翌朝、酒のつまみになるものを見繕ってそれを手土産に、武蔵小金井にある彼のマンションに向かった。

笑顔で出迎えてくれた立花は、少し見ない間に痩せたようだ。勧められるままに、冷房の効きすぎたリビングルームに入った。依然として部屋は散らかり放題で、どこもかしこも薄汚れて見える。ふと気づいて隣の部屋を見ると、以前あったシャンデリアもピアノも見当たらない。

私が初めて立花のマンションを訪れたとき、襖の開け放たれた隣室を見て目を疑った。マンションの欠陥なのだろうか、それは窓一つない陰気な六畳の和室で、その天井からは豪華なシャンデリアがぶら下がっていた。ほかには和箪笥があり、それはいいとしても、和箪笥に向かい合ってピアノがあった。

すべてがちぐはぐなばかりか、立花にピアノは似合わない。

「立花さん、ピアノ弾くんですか?」まさかと思いながら尋ねると、

「ああ、ピアノもシャンデリアも、麻雀でせしめたんだ。僕ね、大学を卒業してすぐに銀行に勤めていたのは知ってるよね。銀行を辞めたあと、株でしばらく食べていた時期があったんだ。あのころね、競馬をやったり、麻雀三昧の日を送ったりと、やくざな生活をしていたもんだ」と、片頬で笑った。

「そのあと、ラークトラベルを?」

「ああ、株で儲けたお金を元手にね」

あのときも今も、ジャズが静かに流れている。

仕事以外にはものぐさな立花が、台所に立って甲斐甲斐しく動き回っている。やがて、部屋の中にコーヒーの匂いが立った。

立花はコーヒーを差し出しながら、唐突に言った。

「僕ね、末期の膵臓癌なんだ」

彼の言葉が私の胸にストレートに入ってこない。眠ったように、遠くに聞こえる。

「このところ、どうも身体の調子が悪くてね、ちょっと調べてもらったんだけど、先月の初めに検査の結果が出たんだ。もう手遅れだって。一年は持たないだろうって言われたよ」

「うそ!」

叫んだ言葉が反対に嘘くさく感じられる。現実と、それを受け入れるべく私の心が折り合いがつかずに、空回りしている。

「最初はね、急に痩せたと思ってはいたんだ。だけど、一時期は会社に振り回されていたし、会社を辞めたあとは部屋で自転車こぎをしていたから、そのせいで痩せたんだろうって、思っていたのに……」

少しずつ彼の言葉が胸の中で意味を持ち始める。言われてみれば、立花はずいぶん痩せたのだ。彼が急にはかなげに見えた。立花の顔を凝視する。いつものぎょろ目が、今日は二つの小さな穴ぼこに見える。底のない暗闇。

「今、大丈夫なんですか。寝ていなくっていいのですか?」

返すべき言葉を探した挙げ句に発した言葉は、何と間が抜けていただろう。

立花が不意に椅子から立ち上がった。

「大丈夫、ほらね」、立ったままで両手を広げる。

「今はまだしっかり歩けるし、車だって運転できるよ。買い物だって行けるんだ」

こうして見ていると、やはり彼の死が一年以内に迫っているとは信じられない。また、信じたくないけれども、今は現実を受け入れるしかないのか。すると、「立花さんが病気になったら、必ず面倒を見てあげます。立花さんの死に水は私が取ってあげますから」と言った、自分の言葉が甦る。

私の言葉に偽りはなかったはずだ。だが、あのとき、立

花の死は二十年、三十年先だと思っていなかっただろうか。もしかしたら、心の片隅で二、三十年のうちにこの言葉が時効になると思っていなかっただろうか。自分の言った言葉に後悔はないが、あの言葉が今、心の中でずっしりと重みを増してくる。決断を迫られていた。

自分にはまだまだ手のかかる二人の子供がいる。優先順位は二人の子供に決まっている。両親は今のところ二人そろって健在なので、まあいいだろう。その両親に子供の面倒を見てもらっているといっても、自分が母親であることに変わりはない。立花にかかずらっていると、これまで以上に子供への手を抜かざるを得ないだろう。しかも立花は重篤なのだ。

以前、立花はこのマンションを私にくれると言った言葉が思い浮かぶ。築三十年ほど経つとは言え、武蔵小金井駅からそう遠くもなく、3DKのこのマンションは、決して安くないだろう。おそらく彼の面倒を見て、死に水を取れば、彼の言葉は絵空事ではなくなるに違いない。マンションは確かにありがたい。だが、マンションをもらうという打算だけで働けるかといえば、働けない。

病気の立花付きのマンションと、子供を抱えての自分らしい生活とを天秤にかければ、当然後者が重いに決まっている。それでも自分には立花への思慕と約束がある。迷路に迷い込んだ私の胸に、

「僕、七尾と結婚する」

立花の言葉が、ひょいと飛び込んだ。以前にも聞いた言葉である。だが、以前に聞いたときとはまったく色合いが違う。

「僕の病気が手術で治るというなら、入院するよ。でもね、もう手術はできないんだ。だったら入院したって意味がないじゃないか。何より、病院で死にたくないんだ。家で死にたい。それも、金沢に帰って、お袋が住んでいた家で死にたい。だから、どうしても親身になって介護してくれるパートナーが必要なんだ。だけど、こんな我が儘、結婚していないと言えないじゃないか」

ちょっと待ってと思う。在宅介護なんて約束の埒外でないか。しかも金沢に行くなどと、想像すらしなかった。だが、これで私の心はすっかり軽くなった。あの約束は何のためらいもなく反故にできる。

「僕ね、もうすぐ死ぬとわかったときに、残されたわずかな時間をどうやって過ごしたいかと、真剣に考えたんだ。そうしたら、まず最初に頭に浮かんだのは、残された時間を金沢で過ごしたいということだった。それも七尾と一緒でないとだめなんだ。七尾と結婚をして、二人の息子と一緒に金沢で暮らしたい」

彼は私の気持ちをよそに、自分の思いを吐露する。

「若いころはね、父親も金沢も嫌いで故郷を捨てたような

もんだけど、最近やたらと金沢が懐かしいんだ。これが年を取るってことなんだね」

一語一語、かみしめるように言葉をつないでいく。

「僕ね、こんな無機的な鉄筋コンクリートの中で死にたくないし、こんな人工的な街で死にたくないんだ。それからね、病院で死ぬのもいやなんだ。延命措置とまでは言わないまでも、医者に生かされるっていうのがいやなんだよ。……ねえ、七尾、家で死ぬとなると、ずいぶん迷惑をかけるけれども、こんなことを頼めるのは七尾しかいないんだ」

そこまで言うと、私を見据えて、

「たとえいたとしてもだ、七尾でないとだめなんだ。七尾と一緒に、金沢の雪をもう一度見たいなあ」と、一気に言った。

それから立花は遠くを見つめるように、目を泳がせた。その目に故郷の雪が映っているのだろうか。そう思った瞬間、雪の金沢にいる自分を想像していた。その直後にそれを打ち消す。それでも彼の言葉が、恂々と私の胸に染み込んでくる。私の中で、たった今聞いたばかりの立花の言葉がぐるぐる回り、彼の死が私にも迫ってくる。この孤独な人を見捨てることができるだろうかと、心が揺れる。子供たちならば、金沢に連れて行けば良いではないかとふと思い、慌てて打ち消す。ああ、今、彼を抱きしめることができたらどんなにいいだろうと思う。愛しささえ感じている。やはり私は立花を見捨てることができない。結婚はしなくても……いいのなら。

立花は六十四歳、父よりも二歳若いが、母より二歳年上だ。世の中にはそんな年齢差の結婚がないわけではないけれども、この二十六歳という年齢差が、ほどけない知恵の輪のように、私をがんじがらめにしている。

「立花さん、立花さんは私のお父さんみたいな人ですもの、どうしても結婚はできません。でも、結婚をしなくても、私、ちゃんと立花さんの面倒は見ますから。心配しないでください」

立花は目を伏せたまま首を横に振った。

「そんなに籍にこだわるのなら、養子だったら、……養子はだめなんですか?」

首を横に振った。

「立花さん、結婚なんてしなくても、立花さんは私の大切な人に変わりはありません。どうか、立花さんのお世話をさせてください」今度は懇願している。自然に出た言葉だった。

私にとって本当に大切なことは、結婚届という一枚の紙切れでなく、本当の家族のように彼に寄り添いたいと願う、切実な思いだった。だが、私の言葉への返答がない。

「それが負担だったら、いつか言ってたマンションはしっかりもらいますから、それでいいでしょう?」

しばらく考え込んでいた立花だったが、私の目を見据えると、ようやく口を開いた。

「僕ね、やっぱり七尾と一緒に暮らしたい。七尾と結婚しなくても、七尾と暮らす。七尾、本当にいいんだね。僕にとっての一年は、ほんのわずかな時間だけど、君にとっての一年は本当に長いと思うよ。それでもいいのかい？　七尾に頼っていいのかな。苦労をかけるけど、いいんだな」

「私に介護がしっかりできるかどうかわかりません。それに私、料理が下手ですよ。それでも良かったら、一所懸命に立花さんのお世話をします」心を込めて、言葉を選びながらゆっくり言った。

こうして、立花の介護をすると決心したものの、両親を説得する自信はまったくなかった。保険会社に長期の休暇願を出したあとも、両親への説得をぐずぐずと日延べしていた。だが、いつかは通らないといけない道だ。意を決して打ち明けた。ところが、両親の反応は拍子抜けするものだった。

「朱里があんなにお世話になった社長さんだもの、十分にお世話してあげなさい。本当はね、私は保険のセールスマンってのが、どうも好きになれなかったの。その点、社長さんのお世話なら、新しい仕事だと思って割り切ればいいわ。いい仕事じゃないの。ねえ、お父さん」

これで私の金沢行きは本決まりとなった。それを機に、二人の息子を引き取るつもりだった。それが立花の意向でもあったので、当然四人で金沢に行けるものだと思っていた。ところが、両親がどうしても長男の弘樹を手放したがらない。「昂はまだ小さいからしかたがないけど、弘樹は中学二年だよ。受験を考えると可哀想じゃない」と言って聞かない。それよりも、弘樹自身が金沢行きを拒んだのだった。こうして弘樹を残すことになったが、弘樹の心中をおもんぱかると、気が重かった。

金沢に発つ日、思いがけなく弘樹が武蔵小金井のマンションに来てくれた。おそらく母は私が金沢に行くのは、新しい仕事のためだと言い聞かせてくれたのだろう。弘樹は立花に向かって、

「お母さんをよろしくお願いします」深々と頭を下げた。

「先生、最近どうも、具合が悪いんです。お腹は痛いし、息切れはするし、つらくてかなわんのです」立花がホームクリニックの医者に訴えている。

これまでに見たこともない苦痛にゆがんだ顔と、聞いたこともないあえぐ声だ。医者の背後に立っている私の胸が痛む。彼が時々お腹が痛くなるのはもちろん知っていたし、息切れもしていた。だが、「つらくてかなわん」とは思ってもみなかった。彼の病状は思った以上に進んでいるのを思い知らされた。彼は私に心配をかけまいと、身を裂かれ

るような痛みやつらさを我慢していたのだろう。「もう我慢しないで。私に甘えて」、彼に向かって叫びたかった。

「お腹の痛いのは痛み止めで治まるでしょう。それよりも、どうもこの息づかいがくせ者ですね。一度大学病院で検査してもらったらどうでしょう」、そう言って医者は帰っていった。

ホームクリニックの医者の勧めに従って、立花は大学病院で検査入院をすることになった。その入院の朝、昂を保育園に送り届けると、そそくさと家に戻り、入院に必要な品々を点検し、立花の着替えを手伝った。それから一足先に家を出て、車を玄関前に着けて待っているが、彼はいっこうに姿を見せない。おぼつかないながら、玄関先まで歩いて来られるはずだ。どうしたのかと車から降りて寝室に戻ると、立花がベッドの上に倒れ込んでいた。ベッドから下半身を下ろし、上半身は両手を広げ、蛙のようにうつ伏せでベッドにへばりついている。

「立花さん！」声を張り上げた。

「大丈夫、大丈夫、ちょっとめまいがしただけなんだ」立花はベッドに片頬をくっつけたままで、笑みさえ浮かべている。

「大丈夫じゃないですよ。救急車、呼びますね」少し声を荒げた。

「本当に大丈夫なんだ。救急車なんて、恥ずかしいじゃないか。絶対に呼ぶんじゃないよ」と、向こうも負けず強い口調である。

彼の口調に負けて肩を貸すと、何とか立ち上がることができる。難なく車にも乗れたので、予定通り大学病院に向かった。

ところが、病院の駐車場に着いて後ろを振り返ると、立花はハアハアと荒い息を吐きながら横たわっている。手を差し伸べようとしたが、すぐにその手を引っ込めた。顔が真っ青だ。

「待ってくださいね。病院の人を呼んで、すぐに戻りますからね」

心の中で「死なないで、死なないで」叫びながら、病院に駆け込んだ。

立花はストレッチャーに乗せられて、緊急で診察室に運び込まれた。診察室の前でしばらく待っていると、医者に呼ばれた。だが、診察室に入ったものの、立花はカーテンに仕切られた向こうのベッドにいるのか、それとも別室にいるのか、見当たらない。医者はパソコンから顔を上げないままで言った。

「今、落ち着いています。さしあたって心配ありませんよ」

その言葉で緊張が緩んだ。安心したのと同時に、ガタガタ身体が震え始めた。震えは容易に治まらない。いつもは立花の死を考えまいと思いながら考え、考えながら考えま

いと思っていた。死をこんなに恐ろしく身近に感じたのは初めてだった。その「恐ろしいもの」は、「心配ありませんよ」と医者から言われても、胸の中に居座ったまま、ようとして動かなかった。

立花の検査入院は予定通り行われるというので、一足先に病室に案内された。しばらくそこで待っていると、車椅子に乗った立花が、看護師に押されて現れた。

「心配かけて悪かったね」

立花の顔にまだ血の気は戻っていない。何も応えられなかった。彼は看護師の手を借りて、どうにかこうにかベッドに横たわる。医者から「さしあたって心配ありませんよ」と言われたけれども、「さしあたって」がどの辺りなのかわからない。胸の中にわだかまっていた「恐ろしいもの」は、いっこうに消えようとしない。

看護師がいなくなり、二人だけになると、彼は何やらささやいた。

「えっ、なに?」良く聞き取れない。

「僕ね、遺産相続するから、七尾と結婚するんだわ」

今度はかすかだが、なんとか聞き取れた。死に追い詰められているかもしれない立花にしては、のんびりした口調だ。一方、私の心は波立っていた。追い詰められたのは私のほうかもしれない。「早く、早く」と、胸が動悸を打つ。何も応えられないでいると、立花はもう一度ささやいた。

「遺産相続するから、七尾と結婚するんだわ」

「結婚します。今すぐにも結婚届の用紙をもらってきます」思わず口走っていた。

こうして私は「七尾朱里」から「立花朱里」に変わった。だましたわけでも、だまされたわけでもないのに、何の祝福もない結婚だった。両親にだけは結婚の報告をしなければならないと気づいたのは、結婚届を出した翌日だった。

両親への報告はかなり勇気が必要だった。ところが、おそるおそるかけた電話に出た母は、

「あら、そう」と、実にあっけらかんとしている。

「怒らないの?」

「だって、結婚しても、今さら失うものもないでしょう。社長さんの看病をしっかりやって上げなさいね。でもね、私から弘樹には何にも言わないわよ。結婚したことをあなたから直接言いなさい」

それだけだった。

私の新しい夫は、二日後に退院してきた。もともと病人なのだから元気なはずはないが、大慌てで結婚届を出した原因の、生きるか死ぬかの様相はどこにも見当たらない。それもそのはずで、私を慌てさせた彼の容態の悪化は、貧血のせいだった。だから輸血をしたらすぐに元に戻ったらしい。死ぬかも知れないという心配が杞憂に終わったのは心底嬉しいけれども、大慌てで結婚してしまった自分が、

いかにも愚かに思われる。だが、考えようによっては、母が言ったように、「今さら失うものはないのだから、別段かまわないか」、小さくつぶやいた。

立花が退院してきたその夜、なかなか寝付くことができなかった。

普段、立花は一階の寝室で、私と昂は二階の寝室で寝ている。緊急の呼び出しはもちろん、ちょっとした用事にも電話の子機を利用しているので、不都合はない。

眠れないままに身体を横たえ、下になった耳を澄まして階下の物音を聞き取ろうとする。だが、下からは何も聞こえてこない。

このままここに寝ていていいのだろうか。

何度も自問自答した。結婚してしまった以上、「妻」が私に大きくのしかかっている。

このままここに寝ていていいのだろうか。

もちろん、立花には「女」を抱く体力は残されていないだろう。性欲だって残されていないに違いない。だが、女を抱けなくても、「妻」の証しを見せる方法はいくらでもあるはずだ。もしも立花が私の裸をみたいと言ったなら、見せないわけにいかないだろう。もしも立花がキスを求めてきたなら、唇を差し出さないわけにいかないだろう。あるいは、私の想像すらできない方法で、妻の証しを求めてくるかもしれない。

私は布団の中でじっと息を凝らし、身体を強ばせながら、電話が来ないことを祈っていた。その一方で、私はじっと待っていた。

立花と暮らすようになってから、昂を交えて私たちは一つの家族になった。立花と私は以前にも増してより深い所で結ばれたような気がする。私の彼への思いが、たとえ父親を慕うような愛情であっても、その愛情が高じれば、必ずや男として受け入れられるに違いない。ましてや、私たちは「夫婦」になったのだ。

私はじっと待っていた。だが、いくら待っても、望んだようなエロスはとうとう私に下りてこなかったし、立花からの呼び出しの電話もなかった。

誰からの祝福も、何の祝福もない結婚だと思っていたのに、次の日の夕方、中條夫婦がカステラを持って祝いにやってきた。二人は私たちの結婚の証人である。私は結婚の証人には金沢に住んでいるという立花の甥が適任だと思ったが、立花がそれを拒んで、隣の中條さんにと提案したのだった。

「このたびは結婚おめでとうございます。お祝いならお酒と言いたいところだけど、修司さんの身体を考えて、カステラにしました。それにしても、僕たちが結婚の証人なんですから、これも何かの縁ですね。どうか、一日でも長く

いてください」

二人はベッドの横に立って、結婚の祝いだか見舞いだかわからない挨拶をして帰っていった。立花は彼らがいる間中、上機嫌だった。

中條さんが帰ってしばらくすると、珍しくまた、チャイムを鳴らす者がいる。玄関の戸を開けると、そこに六十代半ばと思われる女性が立っている。女性は怪訝な目で私を一瞥したあと、「立花です」と名乗った。

中條さんのときと同じように女性を寝室に案内すると、立花はベッドの上で半身を起こして、「義姉さん、ご無沙汰しています」と、頭を下げた。

どうやら彼は病院から義姉に電話をかけたらしい。

「この人はまあ、ご無沙汰してますでないやろう。驚くことばっかりやわ。電話をもろうてびっくりしたわ。病気もびっくりなら、金沢におるのもびっくり。おまけに結婚した言うから、腰抜かすほどびっくりしたわね」

そうして私を睨めつけるようにして、

「この人ね？　奥さんちゅうのは」と言った。

言外に「こんな若い女」という非難が籠もっているように聞こえた。立花はこの、亡くなった兄の奥さんの言葉に臆することなく、

「女房の朱里です」病人とも思えぬ声で言った。

そればかりか、茶の間にいた昂を呼び寄せると、

「息子の昂です」と紹介する。

奥さんは「あらまあ」という表情をしたので、おそらく昂が立花と私の間にできた子供とでも思ったのだろう。私は昂が「おじいちゃん」と言ったらどうしようと気が気でなかったが、昂がすぐに茶の間に戻ったので、心配はすぐに払拭された。

奥さんが三十分ほどで帰ると、立花は昂を自分の息子だと紹介した手前もあったのだろう、

「昂と弘樹のことだけど、どうだ、僕の籍に入れないか。二人はもう僕の子供なんだからね」と、突然切り出した。

それは私も一度ならず考えないではなかった。だが、そのたびに何かが自分を押し留めていた。ついさっき、昂が戻った茶の間を窺いながら応える。

「親の都合だけで名前を変えるのもかわいそうな気がして……。急がなくても、もう少し考えさせてください」そう言ってから、立花にとっては急がなくてはならないのだと、どきりとした。

「まあ、いいさ。好きにするといい。僕のほうは結婚をしたから、もういいんだ。七尾は男を見る目がないからね、僕が死んでも再婚をしないほうがいい。七尾が働かなくても十分なお金は残しておくし、遺族年金だってもらえるからね、安心できるんだ」

「遺族年金って？」

「ほらね、七尾は人一倍しっかりしてはいるけど、どうかすると肝心なところで抜けてるんだ。僕はね、そんなことをずっと心配していたんだ。それはそうと、僕ね、株を持っているんだ。それがこのところの景気で、驚くほど上がったんだよ。それでね、七尾のために遺言書を作っておこうと思うんだ。明日、早速弁護士に来てもらおう。確か、大学時代の同級生が大手町で事務所を開いてるはずだ」

彼は少し自慢するように持ち株の金額を口にした。その金額の多さに度肝を抜かれた。めまいがしそうだ。意識すまいとしても、引き込まれそうになる。それが私のものになるかも知れないと思うと、震えるほど嬉しくなる。だけれども、そんな自分に対して嫌悪感を持ったのも事実だ。これはお金の魔力に違いない。

「待ってくださいよ。さっきの義姉さんにも息子さんがいるんでしょう？　立花さんの甥御さんじゃないですか。それに、福岡にだって弟さんがいるんでしょう？　私、お金のためにここにいるわけでないですから」

「大丈夫、あの人たちは僕がお金を持ってるなんて、夢にも思ってやしないんだから。どうせ会社が倒産して、一文無しになったと思ってるはずだよ。僕の物は全部妻の物だ」

私は立花の愛情を強く感じると同時に、もしかしたら、多額のお金が彼をして結婚届にこだわらせたのでないかと、ふと、思った。だが、それが喜ぶべきことなのかどうか、わからなかった。

私は弁護士の力を借りながら、しばらく遺産相続の手続きに追われた。立花の銀行の通帳や株券で見つからないものがあり、その在処は東京のマンションをおいて考えられないので、昂を連れての上京となった。

立花のために看護師に終日の看護を依頼したが、それでも心配が尽きないので、中條さんにも留守にすることを伝えると、

「時々様子を見に行きますよ」と、進んで世話を買って出てくれた。

カンボジア難民の悲劇を描く
本体価格 1,700 円
御注文はアジア文化社まで

上京した私は昂を実家に預けて、マンションで探し物を始めた。電気も水道も止めたマンションでの仕事は何かと不都合が生じた。半日もうろうろして、どうにか探し物が揃ったときには、思わず「やったあ」と一人で声を上げていた。それから一人で缶ビールを一気に飲んだ。数ヶ月ぶりに喉を潤すおいしさは、泣きたいくらいだった。

本来の目的を達成できたことではあるし、土曜日の終日を母子三人、ディズニーランドで楽しんだ。弘樹は受験勉強があったが、「久し振りだから、しかたがない、昂に付き合ってやるか」と言いながらも、昂以上に楽しんでいるように見えた。が、一番楽しんだのは、もしかしたら私かもしれない。六十四歳の、死が間近に迫った病人とずっと向き合っていると、自分の年齢を見失ってしまう。それがディズニーランドで一気にはじけた。若さが甦り、三十八歳の顔に戻っていたように思う。

三人でハンバーグ定食を食べて、いよいよ最後の仕上げとして、立花と結婚をしたという、弘樹への報告だけになった。弘樹には真実を話そうと意を決して向かい合ったはずだった。ところが、いざとなると、正直な心が悲鳴を上げそうになった。

「お母さんね、立花さんの養子になったの」

つい、口走っていた。一つの嘘にたじろぎながらも、その嘘が大きな嘘に発展する。

「ほら、立花さんに奥さんも誰も、身内がいないでしょう、それで立花さんが亡くなると、財産が国に持って行かれるのよ。でね、お母さんが養子になったってわけ」

弘樹は一瞬、私を責めるような目を向けたが、何も言わなかった。しばらく沈黙が続いたが、弘樹が固く結んでいた口をふと開いた。

「お母さんは立花朱里になっちゃったの？」

声が震えている。私は弘樹の目を見ることができなかった。さらに弘樹が追い討ちをかける。

「僕も立花弘樹になっちゃうの？」

今度は弘樹の目を見据えて私は首を大きく横に振った。

「お母さんは立花朱里になったけど、弘樹も昂も七尾のままでいいの」

弘樹は目を伏せたまま自分に言い聞かせるように、小さく何度もうなずいた。私は弘樹のうなずきにひとまず安堵の胸を撫で下ろしたものの、その胸に急に自分の嘘が頭をもたげる。「私はいったい何をやっているのだろう」苦しさで押しつぶされそうになった。

こうして最後の汚点で、私の上京は苦々しいものになった。金沢に帰り、そんな私の苦しみを少しでも和らげてくれたのは、ほかならぬ、立花だった。

「お帰り」

その温和な一言が私の心に染み込んでいく。この瞬間、

思いがけなくも私は立花を男として愛していたかもしれない。

九月下旬になって、どうにか遺言書が完成した。弁護士がものものしく遺言書を立花に渡して帰っていくと、立花が私をベッド脇に呼んだ。彼は遺言書を示して、

「これで安心して」と、神妙な顔で言った。

私には「これで七尾が安心できるだろう」とも、「これで安心して死ねる」とも聞こえた。

このころから立花の容態は急激に悪化し始めた。それ以前から彼の身体は痩せ細る一方だったが、今や、かろうじて生きるための、最小限度の身体のように痩せ衰えていた。いつかの検診の結果では、癌が肺に転移していることがわかった。そのせいだろう、「エッ、エッ」と頻繁に吐き出すような咳をする。私にめったに訴えないものの、苦しみや痛みは、絶えず彼をさいなんでいるようだ。

病院から酸素ボンベと車椅子を借り、血中の酸素飽和度を調べるパルスオキシメーターを購入した。酸素吸入器を鼻に取り付けた痛々しい立花の姿と、家の中に陣取った医療機器のせいで、彼の死期が真に近づきつつあることを受け入れざるを得なかった。

それでもなお、彼はお手洗いに行くのに私の手を借りようとしない。お手洗いに手すりをつけてあるものの、酸素吸入器を鼻につけ、酸素ボンベを引きずり、車椅子で移動する姿は見るに堪えない。

「どうして私ではだめなの？」

私の悲痛な訴えだった。それに対して彼は首を大きく振るだけである。

「そんなに無理をしたんじゃ、寿命を縮めてしまうわ」

語気を強めて言うと、立花はこれまではまったく力を失っていた目を、ぎょろりと剥いた。痩せ衰え、落ちくぼんだ目を剥くと、ぞっとするほどすごみがある。私は口をつぐんだ。

おそらく彼は、寿命を縮めることと、羞恥心を秤にかけて、寿命を縮めるほうを選んだに違いない。彼の極端なまでの羞恥心にぶつかるたびに、私の胸はつぶれそうになる。もしも立花と私が身体で結ばれていたならば、彼はこの羞恥心をかなぐり捨てていたに違いない。夫婦であるということは、そういうことなのだと、つくづく思った。

立花は抗がん剤の注射を打つと、しばらく熱が出てぐったりするけれども、その苦しみを通り越すと、いつも元気が出た。もちろん、たいそう元気というわけにいかないけれども、それなりに生気が出て、しきりに私と話したがった。

秋日和である。縁側の戸を開け放ち、ベッドの前に椅子を置くと、深く腰掛けた。すると、庭から甘い芳香が優しく流れ込んでくる。金木犀だ。庭には金木犀はないので、

中條さんの家から流れてくるのだろう。つい最近になって、金沢の古い街中を歩いていると、小路のあちこちで甘い香りに行き合った。頭を巡らせると、橙色の小粒の花をつけた金木犀が見つかった。だが、どうしても見つからないときもある。目にはっきり確かめたわけでもないのに、甘い香りは金木犀だと確信できた。金沢は金木犀の多い街である。

甘い香りを楽しんでいると、立花が咳き込み、「寒い」と訴える。縁側の戸を静かに閉めた。そうして二人で話に耽る。話すことと言えば、やはりラークトラベル時代のことだ。

立花の大量の安物買いは、会社でも評判だった。彼はいつもうんざりするほどの缶ジュースやコピー用紙、トイレットペーパー、カップラーメンを買い込んだ。カップラーメンを湯沸かし室に積み上げ、昼食はたいていそれですませた。

「立花さん、ラーメンばっかり食べていたんじゃ、身体に悪いですよ」

新入社員が一度は口にする言葉だ。すると毎年同じ言葉が返ってくる。

「だってね、外食するには、まず往復の時間がかかる。それに何を食べるか考えるのが面倒だ。何よりも、待ち時間がもったいない。そんな時間があったら、仕事をするよ」

立花は掃除嫌いでも評判だった。私が入社したてのころ、汚れた部屋を見るに見かねて掃除を始めると、立花に注意をされた。

「掃除をする時間があったら、電話をかけろ。うちの会社は電話が勝負だ。掃除は掃除の小母さんにまかせておけばいいんだ」

新入社員が立花にしらっとやり込められるのは、毎年のことだ。

朝から雨が降り続いたいやな天気の昼下がり、瀬戸さんが奥さんと一緒に見舞いに訪れた。

瀬戸さんは酸素吸入器をつけている立花の姿に、一瞬、胸を突かれたように見えたが、

「立花、能登のツヅルメとボットやぞ」

さりげなく発泡スチロールの箱を振りかざした。それから、私のほうを振り返ると、

「奥さん、これを立花に煮て食わせてください」と大声を張り上げた。

奥さんと呼ばれて、自然と手が出た。だが、ツヅルメやらボットやら言われても、何のことかまったくわからない。不審に思いながら箱を開けてみると、中から出てきたのは、それぞれ二十センチほどの、生きの良いメバルとソ

イであった。ツヅルメとボットというのは能登の方言だろうか。それにつけても、金沢に来るまでは、魚と言えば鯛か鰺、鯖くらいしか知らなかったが、近江町通いをしてから、ずいぶん魚の物知りになった。

私はいつも、魚は近江町で捌いてもらっている。丸のままの魚にたじろいでいると、瀬戸さんの奥さんが、

「出刃包丁、ある？　私が料理しましょう」と、料理を買って出てくれた。

台所の引き出しに、立花の母が使っていたであろう出刃包丁が、何の役にも立たないまましまってある。奥さんに出刃包丁とエプロンを渡すと、早速包丁をふるって、魚を捌き始める。

「うちの主人がね、朱里さんが結婚をしてくれて、本当に感謝してるの」

奥さんは魚を捌くのがお手の物で、手を休むことなく私に話しかけてくる。彼女は東京出身とかで、さっぱりした気性だと聞いている。それで、ふと、気が緩んだ。

「私、立花さんを本当に尊敬しているんです。だから、立花さんの世話をするのはぜんぜん苦にならないんです。でもね、立花さんにとって、こんな形の結婚で良かったのかどうかというと、わからなくなるんです」

「あなたたちがどんな夫婦か知らないけど、私から見たら、立花さん、本当に幸せに見えるわ。それでいいじゃない。立花さんにとって死と引き替えの結婚だったけど、それが立花さんにとって、最高の幸せというものよ。何にも言わなくたって、立花さんの顔を見れば、いやというほどわかるわ」

立花はいつか、「幸福になるために勉強をするのだ」と言ったけれども、死んでいく人の幸福ってあるのかしらと思う。

奥さんは今度はメバルの料理に取りかかった。

「ツヅルメは塩焼きが一番おいしいの。でも、病人には煮魚の方がいいと思うわ。甘辛く煮ておくわね。……ねえ、立花さんがあなたにぞっこんだったのに違いはないけど、歳もずいぶん違うから、もしかしたら、そこに父親が娘を思うような愛情もあるのかもしれないわねえ」

奥さんは手を止めると、遠くを見るような目をして、

「ふっ」と、息を吐いた。

ガスレンジの上で、鍋の蓋がガタガタ言い始め、甘辛い醤油をまとった魚がおいしい匂いを立てている。奥さんは蓋を取ると息を大きく吸い込んで、「これで良し」とつぶやき、寝室に向かって大きな声を上げた。

「立花さん、ツヅルメの煮たの、食べますか？」

すると今度は瀬戸さんの声が返ってきた。

「食べるそうだよ」

やがて、煮魚がお盆に載せられて、立花に差し出された。

「うまいなあ、うまいなあ」

ここしばらく、食事らしい食事をしなかった立花が、三人の注目を集める中で、すぐに平らげてしまった。

しばらくして、瀬戸夫婦はまだ三時だというのに夕方のように暗く、雨の降る中を、二人肩を並べて帰っていった。

瀬戸さんが立花を見舞ってくれた翌日には金沢は冷え込んだ。そのまま月が変わり、十一月になった。恐ろしく黒い雲が垂れ込めて、嫌な天気が続いている。東京にはない空の重さだ。それでも時には秋晴れの日があって喜んでいると、天候が急変して雷雨になったりする。どうも寒いと思っていると、雨がいつの間にか霙に変わっている。私には霙は雪よりも冷たく感じられたし、雪のような美しさは少しも感じられなかった。

このころ、立花の容態は一日、一日、目に見えて悪くなっていった。普通食はほとんど受け付けないので、食事は果物かゼリー状のものだけになった。一週間前とこんなに違うものかと思うほど、体調は崩れていった。

以前から立花は便秘気味だったが、最近になっていっそうひどくなった。素人判断だが、臓器のどこもかしこも正常に機能しなくなったせいでないかと思う。下剤はもはや役に立たず、浣腸に頼るしかない。だが、彼の羞恥心は相変わらずで、私に決して下半身をさらさない。羞恥心というよりも、浣腸は彼にとって屈辱そのものであったに違いない。それでも、訪問看護師や医者に頼るだけでは事足りないので、彼に何度せがんだことだろう。

「肛門って言っても、ぜんぜん汚くないですよ。恥ずかしい所でも何でもないわ。それに私ばかりか、みんな、いずれは似たり寄ったり、同じ道を行くんですから」

それでも彼は、決して私の申し出を受け入れようとしなかった。

彼は痛み止めを使って効果が出ると眠り、眠っていると思ったら、瞬き一つせずにいつまでも宙を見据えている。そんなことの繰り返しだった。またあるときは眠っていると思ったら、突然口を開く。

「七尾が以前、ラークトラベルのアルバイトの面接で、どうして僕が七尾を採用したかって、とっても知りたがっていただろう」

あまりに唐突な言葉に面食らっていると、勝手に話が進んでいく。

「バイクだよ、バイク。アルバイトの主な仕事っていうのは、各国の大使館にビザをもらいに行くことだった。この大使館というのが、また不便な所にあるんでね、バイクを利用するのが一番効率的だった。ところが面接を受けた六人のうち、三人が免許を持っていなかったんだ。それで二人はその場でアルバイトをあきらめたけど、一人だけ違っていた。『私、バイクの免許だったら、すぐに取ってきます』って、そりゃあ、大きな声で言うんだよ。思わずその子を見ると、目力があるし、この子は使えるなって、僕の直感が働いた。それが七尾だったってわけさ」

言葉は途切れがちで、たどたどしいが、一所懸命に話している。だが、この話なら、私は金沢に来てすぐに一度、数日前にも二度三度と聞いている。それでも時々相槌を打ちながら聞いていると、彼はさらに続けた。

「その子は、胸が大きくて、キュッと上がったヒップと、長い足がすごく格好良かった。それに、改めてよく見ると、黒目がちで、なかなかかわいいんだ」そう言うと、半眼の目で、にやりと笑った。

彼の心は今の私に向かっていない。思い出の中で誰にともなく語っているようだ。私も思わず、クスリと笑った。

こんなふうに、夢ともうつつともつかぬ状態で、立花はしきりに昔のことを話すことが多くなった。それは私の知らない、彼の大学時代や幼少時代、高校時代の話もあった。私はいつか、人は死ぬ間際に頭の中で過去から現在までを、大急ぎで辿るものだと聞いたことがあったので、彼が何かにとりつかれたように昔の話をし出すと、恐ろしくなった。いや、そうではなくて、彼の意識が混濁しているのだろうか。そう思いながらも、私は彼の話に真剣に付き合う。話は少しも未来に向かっていかなかったけれども、二人は過去の中で充分に生きることができた。部屋の中はいつしかたそがれ、私たちは動かない一つの塊りと化していた。

気がつくと、昂を迎えに行く時間を過ぎている。慌てて家を出た。

表に出た瞬間、不思議な感覚にとらわれた。もう夕方だというのに、妙に空が明るい。それに、すがすがしい匂いがする。すがすがしい匂いというのがあるのかどうかわからないけれども、私を取り巻く空気が浄化されたような、そんな匂いだ。保育園に着くまで、ずっとそんな不思議な感覚がつきまとっていた。

保育園では昂が玄関先で待っていて、「ママ！」と駆け寄ってきた。二人で手をつないで家へ帰る道すがら、昂が大きな声で歌い始める。保育所で習ったのだろう、知らない歌だが、明るい良い歌だと思っていたら、メロディーがだんだん怪しくなってくる。怪しいと思っていたら口をつぐんで、ふいに、立ち止まった。

「ママ、あのお花取って」と、指さす。

指の先を見ると、民家の庭先にピンク色の山茶花が咲いている。その辺りだけにまだ夕暮れが訪れていないように、明るく、鮮やかに咲き誇っている。

「きれいねえ、でもあれはよそのお家のだから、取れないの」

「だって、おじいちゃんにお見舞いに持っていきたいなあ」と昂は山茶花を見上げる。

私はすぐに前言を撤回した。

「ごめんなさい、一枝いただきます」見えない家主に断って、枝を手折った。

立花は昂を子供のようにも、孫のようにも思っているといっても、かわいがるには身体がいうことを利かない。またそれ以前、少しは体力が残っていたときにも、子供をどう扱っていいのかわからないようだった。だが、立花の気持ちが伝わるのか、昂はいじらしく立花を大切に思っているようだ。手折った枝を渡すと、愛おしむように花に見入っている。私は思わずそんな昂を抱きしめていた。そして私は涙をこぼしていた。

その涙に私は我ながら驚いた。めったなことでは泣かない私が、こんな場面で泣けてくるのが不思議でしょうがない。が、ふと思い当たることがあった。私は異常なほどナーバスになっている。ついさっき、家を出たときに感じた違和感はそのせいだろう。空気がすがすがしく浄化されたように感じたのは、立花と一緒にいる寝室が、重く沈んでいたせいだと、今さらながらに気がついた。話で盛り上がっていても、閉め切られた部屋にはもう帰らない日の思いがたゆたい、死に瀕した病人のにおいが染みついている。

私は「死」と向き合うということは、こういうことだと思い知らされた。一方で、昂は間違いなく未来に向かって歩いている。その昂さえいれば、大丈夫、これからも立花を支えていけると確信した。

家に帰ると、立花は眠ってはいたが、その顔に疲労がありありと見える。ついさっきまで話に夢中になりすぎたせいだろう。昂に促されて、二人で山茶花を花瓶に挿して、そっとテレビ台の上に飾った。

最近になって、夜中に二、三度は立花の様子を窺っている。この日も夜が更けてから彼の寝室をそっと開けた。すると、部屋が異様に明るい。テレビの明かりである。消し忘れたのか、あるいはテレビを観ながらいつの間にか眠ってしまったのだろう。山茶花がその明かりで幻のように不思議な美しさを放っている。テレビを消そうと寝室に入り、何げなく画面を観て、ぎょっとした。

テレビに映し出されていたのは、無修正のアダルトビデオだった。おそらく立花が、こっそり東京のマンションから持ち出したものだろう。それは私が初めて観た、そして想像したこともなかった、あられもない男女の絡んだ映像だった。

男の性への執念に身体が震えた。

テレビを消し、部屋から出ようとしたときだった。立花が私の腕を捉えた。私は私をとら捕まえた掌の力に、思いがけずも男を感じて、金縛りに遭ったように身動きできな

くなった。

ようやく金縛りが解けたとき、彼の硬く食い込んだ指を優しく一本ずつ放し、蛍光灯を点けた。

私は光の中でパジャマを脱ぎ、肌着もかなぐり捨てた。

立花の目が潤んでいる。

私にはもちろん、二十代の若さはないけれども、このとき、なぜだか自分の身体が愛しいくらいに美しいと感じていた。私は自分の美しさを惜しむように、両腕を胸の前でクロスさせたまま、立花の前に立った。彼の目が私の首から胸へ、胸から恥部へと下りていく。そしてもう一度私の身体を上に辿り、胸元で止まる。私は両腕を解いた。彼の目は私の乳房に執着し、執拗にねぶりつづけた。

「朱里」、忘我の声を上げた。

十二月に入ってすぐに、立花は医者から「あと一ヶ月ないでしょう」と宣告を受けた。それは私にとって受け入れがたい宣告であった。立花が「余命は一年もない」と宣告されたのは五月である。だから「一年もない」という言葉を正確に解釈すれば、何の不思議もない。だが、私は「一年」という言葉にすがるように、来年の四月までは持つだろうと確信していたのだ。医者の宣告に全身から力が抜け、地に沈み込むような絶望感があった。立花がこの世界から消えてなくなる、想像するのも恐ろしかった。

あの夜を境に、私の立花への気持ちは変わった。以前の私は立花の死を丸ごと引き受け、死の痛みを共有し、そしてそれは彼の死とともに終了するはずだった。だが今は明らかに違う。私はきっと、彼の死後もいつまでも彼の魂を抱えて生きることになるだろう。

立花が愛おしくてたまらない。

だが当の本人はあと一ヶ月と聞かされて、いっそ、すっきりした表情を見せた。医者が帰ったあと、潤んだ目で私を見つめて言った。

「朱里のお陰で楽しかったあ」

何も言えなかった。

医者の宣告を裏打ちするように、それからあと、立花の容態はまったく油断できない状態になっていった。時に水さえ飲み込めないこともあったし、酸素吸入をしていても、「ア、ア、ア、カ、カ、カ」と、呼吸するのも容易でないようだった。

痛め止めの薬の力を借りて、とろとろと眠っている時間が多くなった。それでも、こんな死の淵に立たされた立花にも、生気を取り戻す時間はまだ残されていた。

「もう一度雪が見たかったなあ」

彼が唯一、執着を見せたのは、金沢の雪だった。

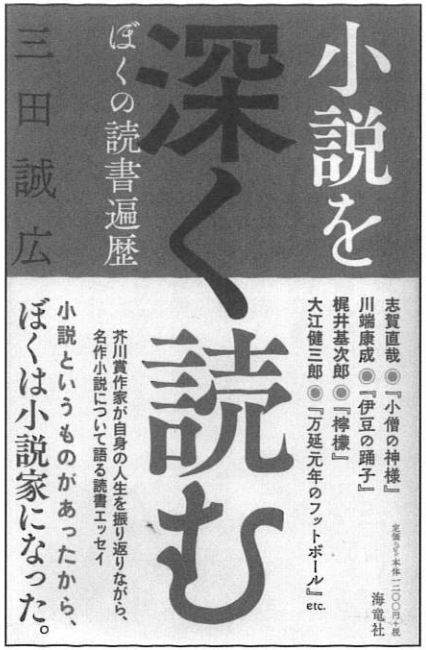
十二月初めにしては珍しく晴れた日だというのに、ふと目覚めた立花が、

「雪、降ってない？」と、すがるように目を泳がせる。
私はことさら縁側の障子戸を開けて、彼に雪の降っていないことを見せなければならなかった。
また早朝、立花が「七尾、七尾」と、私を起こす。そのころは二階の寝室を引き払い、茶の間に寝ていた私は何事かと飛び起き、寝室の明かりを点けると、
「七尾、雪だよ、雪」と、衰えているなりにも興奮気味に言う。
「昨夜は本当に雪が降ったんだ。本当だよ。それも大雪だ。だってしずり雪の音がしたんだ、間違いないよ」
「しずり雪？」
「ああ、木の枝から雪がね、落ちる音がしたんだ。その雪をしずり雪って言うんだよ」
訝しく思いながらも障子戸を開けると、空はまだ暗く、寝室の明かりを頼りに庭を見ると、雪の気配もない。縁側から冷たい風が流れ込んだ。
このころからだったろうか、立花は少しでも気力があると、自分の葬儀について話すようになった。
「まだ若い七尾に葬式を仕切らせるのは心苦しいけど、よろしく頼むね」
そう言って私に金沢の地図を買ってこさせると、その地図を開いて、東山にある立花家の檀那寺の法勝寺と、墓のありかを教えてくれた。
「僕の葬式には誰が来てくれるだろう。東京からね、ラークトラベルの誰かが来てくれたらね、ホテル代と交通費はこちらで持ってくれないか？」
そう言って眠り、眠りから覚めると、
「僕の葬式にね、ジャズを流してほしいなあ」そう言ってまた、眠りに落ちた。
それにしても、立花が葬儀場の下見に行くと言い出したときには、唖然とした。しかも車椅子で行きたいと言う。
「車椅子なんて、冗談じゃないですよ」
葬儀場は歩いて十五分ほどの近場にあったけれども、このごろは寒さも尋常でない。瀕死の立花をどうして寒風にさらすことができるだろう。
だが、どうしても彼を押しとどめることはできなかった。
葬儀場に行くと決めた日は、この冬一番に冷え込んだ。日延べを提案したけれども、彼は一日たりともおろそかにできないようで、あとに引かない。また、身体の衰えよりも精神力が勝るのか、最近になく元気な様子を見せるのである。
それで私が折れて、立花を完全防寒で仕立て上げた。パジャマの上からセーターを着せ、セーターの上からダウンジャケットを着せて、頭には急きょ買い求めた毛糸の帽子をかぶせた。それでも足りないので、車椅子に座らせてから、毛布でぐるぐる巻きにすると、さすがの立花も、

「これじゃ、まるで簀巻きじゃないか」と苦笑いをした。
ポシェットタイプの酸素ボンベをぶらさげ、酸素吸入をしたまま車椅子で外に出た。すると立花はこれが見納めだと思うのであろう、私にぐるぐる巻きにされているので、不自由ながらも目をきょろきょろさせているようで、頭がしきりに動いている。
車椅子が大通りにさしかかったときだった。
「七尾、雪だよ、雪」、突然叫んだ。
空を見上げたが、雪など降っていない。また、例によって彼の空想かと思っていると、私の目にも一ひらの雪が映った。そうして一ひらが二ひらとなり、とうとう雪が舞いだした。
「七尾、雪だね」
立花が身をよじるので、毛布を少し剥いで彼の手を自由にしてやった。
「七尾、楽しいね、まるで雪の日のピクニックだね」
彼は車椅子の上で身体を揺すり、肘掛けをバンバンたたいて、喜びを表しているようだ。そうしてできるだけ多くの雪を受け止めようとするのか、顎を突き出し、顔を空に向かって上げる。
雪はその顔に、しきりに降りかかっていた。

（「飢餓祭」46号より転載）

小網春美　こあみ　はるみ
1947年生まれ
金沢市在住
共立女子大学文芸学部卒業
高校非常勤講師として30年間勤務
同人誌「北陸文学」などを経て、2019年より「飢餓祭」同人となり、現在に至る



飢餓祭

奈良県

最大限の完成を目指して

「飢餓祭」創刊は、一九八六年十二月ですが当時は印刷所に入稿して出来上がりまで数ヶ月を要した記憶があります。活版での印刷で、丁寧で親切な下町の印刷所は多くの同人誌が順番を待っていました。

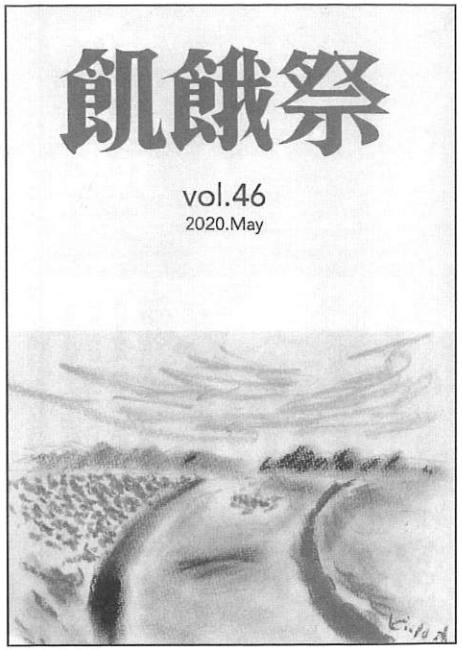
基本的に大阪文学学校の通信教育部の卒業生を土台にしていて、長く文学学校のチューターをしていた、故竹内和夫氏の薫陶を受けました。

竹内氏は三十代で芥川賞候補になった作家であり、また中学校教員を続けながら、「VIKING」始め、多くの同人誌の編集を引き受けてきました。そしてまた文学学校夜間でのチューターをやり、後には通信教育部に替わって、二〇年が経ち、ようやく私共同人誌「飢餓祭」が生まれることになったのです。

一人一人の作者を理解し、一つ一つの作品を大切にアドバイスする竹内氏の姿勢は、多くの個性を生み、今につながっています。

「飢餓祭」は創刊から三五年のあいだ、途切れず発刊してきましたが、まだ現在48集に向けて活動しているところです。一集の完成に九～十ヶ月の時を要したのは、関東、北陸から九州まで同人が全国に散らばっていたにもかかわらず、大阪に一同に集まっての下読み合評会に力を入れてきたからです。互いに書く立場で読み手として一作一作向き合う合評会は、帰りに重い宿題ももらいますが、その指摘から成長の糸口を見つけることができます。

書き上げた自らの作品コピーを、まず同人全員に郵送し合い、日を決めて大阪の会場に集まり、早朝から一日をかけて全作品の意見、感想、アドバイスを互いに述べ合います。日暮れてすべての合評が終わるときには全員疲労困憊して居酒屋へなだれ込むという流れでした。



2019年9月、45集完成合評会　姫路文学館　望景亭にて

現在もほぼそのシステムに変わりはありませんが、パソコンを全員が持つ状態で、作品データーなどは添付メールで送り合えます。さらに合評後の書き直し作品を提出した編集会議後、再び手入れをして完成作品が並びます。発行部数は約260部、データーまとめをし、校正をくり返し、完全データーとして印刷会社に入稿すると、そこからは一月以内で本となっています。

昨年、コロナ禍によって初めて合評会を開くことができませんでした。集まっても年に二回の「飢餓祭」ですので、それは大きな痛手です。オンラインや文書送付という別の道があっても、出会ってことばを交わし、向き合うことは、実存することに不可欠なのだと思い知らされます。が、さらに48集の今回の下読み合評も集まることはできそうにありません。特に大阪の変異ウィルスによる爆発的な感染者数増加で、先の見通しが立ちません。同人誌は老人誌と揶揄されるほど、平均年齢も決して低いとは言えずワクチン接種の徹底ばかりが待たれます。

とはいえ、そんな状況にあって、今回48集の下読み合評に提出された作品の合計枚数は、原稿用紙で一〇〇〇枚を超えています。予想ページ数は372ページ。現在同人一二名、一〇〇枚を超える作品が五作。質、量共に力作がそろいます。

創刊号のあとがきに、竹内和夫氏が書いています。

最高の力を出して良い作品を

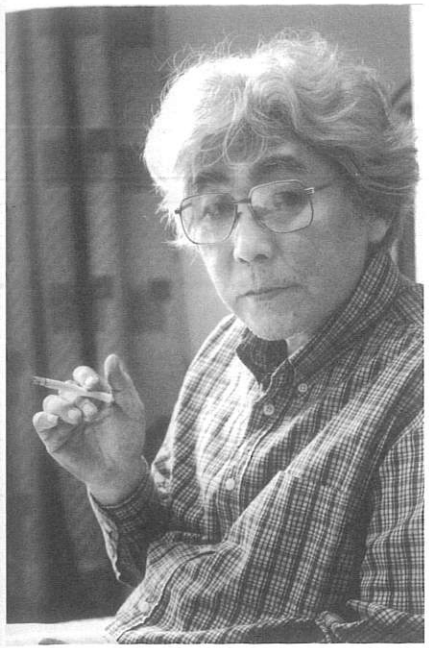
「そういえば、みんなどこか餓えた顔をしている。餓えを満たそうとして一字一字文字を刻みつけるごとに、さらに餓えの自覚は深まるかも知れない」

欠落し、喪失したものを深く見つめ、寄り添って書いてきたのだ、餓えたものの文学だという自負があります。

「飢餓祭」という誌名は、ランボオの詩編からとられたことばです。コロナウィルスが世界中に蔓延し人類を苦しめる今、日本のわずか一隅での同人誌という営為であっても、なおまだ書くべきことがあり、表現の欲求があり、最大限の完成を目指して発行する矜持が一人一人、一作一作にあります。

売れるもの、経済的に優れたものがより上位であるという価値観はあらゆる分野を席巻しています。妥協をせず、最高の力を出してより良い作品を書き発刊する行為は、そんな現代にあって無駄な抵抗と見なされることもあるかも知れませんが、たとえ小さな光であっても高く掲げ、消されずに輝きたいと考えています。

（「飢餓祭」編集人／夏当紀子）



竹内一夫氏遺影

飢餓祭の会
〒635・0074
奈良県大和高田市市場八四・二六
夏当方
TEL 0745・53・5123

破壊者たち
五十嵐勉
ENOLA GAY
B2
広島へ原爆投下に向かうB29の乗組員たち。殺戮の果てしない行為を辿るカンボジアの少年ポル・ポト兵。さらに平和な東京のマネキンを壊すアルバイトの中に潜む破壊の連鎖。破壊者たちの行為を追う新・破壊小説
アジア文化社
1700円　御注文はアジア文化社まで